

宮崎県における児童生活詩の展開 (一)

—— 昭和戦前期の綴方教師 ——

菅 邦男

一、詩を生活へ

さがわ・みちお(寒川道夫)は、「児童生活詩小史」(『児童生活詩の理論と実践』青銅社)の中で、「『赤い鳥』が、北原白秋氏の指導によつて、古い童謡から子どもの自由詩を発見したとすると、それを、生活詩に発展させた最初のモメントは『綴方生活』グループにある。」と述べている。

『綴方生活』は昭和四年十月に発刊され、生活綴方運動の基盤を成した雑誌である。児童詩に関して言えば、昭和六年二月に稲村謙一の論文「詩を生活へ」を掲載した雑誌でもある。稲村謙一はその中で、それまでの児童詩が「ブルジョア的、宗匠的、隠遁的、非生活的な態度」に陥っているとし、次のように提言した。

詩を生活へである。

生活の中に詩を見出し、詩を生活の中に生むのだ。

芸術至上主義的リアリズム、ブルジョア的リアリズムを捨てるのだ。

生活への肉薄だ。生活への力強い働きかけだ。生活の積極的認識だ。構成だ。批判だ。

児童詩を「生活詩」へと導いた有名な宣言である。しかし寒川道夫によると、「生活詩」という言葉自体は、稲村謙一が昭和八年に著した『生活への児童詩教育』(厚生閣)によるという。

「生活短歌という名前は、すでに啄木の歌がでた時にいわれていたようであるが、『生活詩』という名称が、児童詩の上で呼ばれるようになったのは、稲村謙一のこの著書によつてであろう。これは従来の小市民的な赤い鳥詩に、はっきりアンチ・テーゼをつきつけたものであり、同時に、「生活詩」の称呼をもつて、児童詩を詩人の手から教育者の手にとりもどす力となったものである。」

いずれにしろ稲村謙一の発言が、日本の児童詩を、「赤い鳥」児童自由詩から「生活詩」へと移行させたのである。また寒川は稲村の言

おうとするところを的確に引用している。

稲村氏はこの著書で次のようにいっている。「花鳥風月の趣味が、生活から逃避しようとするのに対して、生活詩のもつ方向は、生活に即こうとする態度である。(中略)新しい生活的な精神に生きようとする僕たちの思念するものは、その憂き世、汚れて見えるこの人生を愛するのである。その生活にこそ、自らを生ききろうとするのだ。そこに生活詩の根本的態度が根拠する。僕たちはあくまで人間と、それを営む生活と、それを作る社会と人生を愛する。それにぶつかっていく強靱な生活意欲を希求する。僕たちは生活を俗事だとは考えない。いやその俗事にこそ詩を見出すのだ。生活詩、そして生活に即く態度、このゆるぎなき地殻の上に、児童詩をうちたてよう。」と。

自らの拠って立つ生活の中にこそ詩はあるというのである。
では、こうした時代にあつて、宮崎県ではどのように児童詩教育が展開されていたのだろうか。

二、『鑑賞文選』等への投稿

『綴方生活』が刊行される前後には、数多くの綴方雑誌が出ている。宮崎県内には何も残されておらず、また雑誌自体が散逸しており、見ることが出来るものは極めて少ない。しかしその限られた雑誌の中にも、宮崎の子どもの作品を見出すことができるのである。

例えば、大正十四年(一九二五)六月に創刊された学年別月刊誌『鑑賞文選』(文園社)であるが、昭和二年の十九号に宮崎の子どもの作品を見ることが出来る。

① 『鑑賞文選 二年』十九号 昭和二年(一九二七)

綴方「つゆ」 宮崎・東白杵・南方校 黒木道男

② 『読方綴方 鑑賞文選』25号 昭和二年(一九二七)

「俳句」

*宮崎・西諸県郡・小林校(高二) 竹原サエ

小影よりピカ／＼光る螢かな

*宮崎・西諸県郡・高原校(高二) 池福幸夫

美しき砂の光りや春の水

「少年少女 新聞欄」第一号

笑話

甲「君、朝鮮は雨が多いんだね、大洪水が各地にあつたではないかの？」
乙「そうだよ、朝鮮アメと云つて有名なんだよ。」

宮崎高原校（高二） 池福 幸

滑川道夫著『日本作文綴方教育史3』（昭和篇1）には、『読方綴方 鑑賞文選』は「菊版三二ページ定価五銭、高等科用二四ページ定価七銭、計七冊。」とある。定価五銭と、安いこともあつて、よく読まれたようである。

しかし現存する物は少ないらしく、殆ど見ることができなかつた。僅かに宮崎県関係で見出した作品が、上の二点である。
綴方「つゆ」（南方校）は、指導者名はないが、木村壽の指導である。南方校は、宮崎師範卒業後に勤務した二番目の学校である。木村壽はこの南方小学校で初めて一年生を持ったと言っている。木村壽の初期の指導作品である。これについては後述する。

俳句は西諸県郡の子どもの作品である。小林小学校と高原小学校だが、高原小は、大正九年頃に「赤い鳥」に童謡を投稿していた押領司篤政の在職した学校である（押領司篤政については、宮崎大学紀要・前号の「宮崎県における『赤い鳥』児童自由詩の展開』において述べた）。押領司篤政は大正十五年当時、後河内小学校に勤務しており、雑誌『宮崎県教育』に「童謡雑感（一）（二）」を書いている。俳句の指導者が誰か、今のところ不明だが、西諸地方の教師が押領司篤政に続いて全国誌に投稿していたことを示している。

「笑い話」は他愛もない話だが、「新聞欄」は初めて作られたもので、高原校の指導者が以前から『鑑賞文選』を読んでいたことが分かる。「記者より」には、次のようである。

「新しくこの欄を作りました。その時々が出来ごとを書いたり、其他参考になることや、皆さんからいただいた材料でつくつて行くつもりです。どしく投稿して下さい。短くて面白いものがいいです。皆さんの村の出来事や、言ひ伝へなども知らせて下さい。」

新しくできた欄に最初から投稿しているのを見ても、これ以外に、宮崎県の学校から投稿掲載された作品が、少なからずあるものと思われる。

この他、昭和初期のものでは、『綴方教育』に昭和二年頃から宮崎の子どもの作品が掲載されている。『綴方教育』は大正十五年四月に菊池知勇を主幹として創刊された、日本最初の綴方専門誌である。滑川道夫の『日本作文教育史2』（大正篇）によれば、廃刊は昭和十六年三月号で、通巻一八六号という息の長い雑誌である。子ども向けとして『綴方研究』（小学校低・中・高学年用 大正十五年六月創刊定価五銭）があつたが、昭和九年四月号から低・中・高学年用をまとめて一冊とし、『佳い綴り方』として発刊している。収録作品には、複数の人による「評」が付いている。

※『綴方教育』第二卷第十一号（昭和二年十一月）

詩 「松の木」 尋五 大岩根政良

※『綴方教育』第二卷第十二号（昭和二年十二月）

詩 「わな」 尋四 小城泰三

指導者名は、「箕部哲三」とある。学校名は無いが、これは清武尋常高等小学校の子どもの詩である。

三、清武小学校の子どもの詩

↳「箕部哲三」とは誰か

松の木

尋五 大岩根政良

四本ならんだ松の木
根のもり上つた松の木
やにかたかくてかたかくて松の木
ごーつごーつ
いつもなつてる松の木

(箕部哲三指導)

富原義徳 これはすきな詩です。「松の音」をきいたのはいゝ。

正富汪洋 第三行目に、くふうが足りない。寧ろ此の行はない方がましだ。一行とると相当にいゝものだ。

百田宗治 これには詩の形がある。第三行は不要、四行と五行を合せて一行にする。

福田正夫 リズムの転化をとる。佳作。

菊池知勇 第三行をとるとなかく面白いです。各行の終りの主語止めも、この詩ではちつとも厭味にならずに、充分に利いてゐます。

力強い詩である。正富汪洋と百田宗治は第三行を「寧ろ此の行はない方がましだ」「第三行は不要」と言っているが、この「やにかたかくてかたかくて松の木」は独特のリズムがあつて、なかなか面白い。味のある表現である。確かに無い方がまともよりはあるかも知れないが、そうすると面白味に欠ける。

わな

尋四 小城泰三

ぼたつ 落ちた

わなが

これで 出来た

ばんざい!

これならかゝるぞ

(箕部哲三指導)

富原義徳 つまらない。詩的香気がうすい。

百田宗治 氣息が感じられる、それだけのものなれどそれだけでもよからう。

福田正夫 詩材に生活をえらんだところをとる。気分もよくわかる。が、この単的な外に詩としてのやはらかない情趣が欲しい。

—— 男の子としては無理もない表現であるが。

「ぼたつ 落ちた」というのは、完成したわなを試してみた時の音だろうか。餌をついばもうとすると、上から落ちてきて首をしめる細い横木が、地面を打った音だろう。うまく作ることができて、力強い音がしたのである。福田正夫が「詩材に生活をえらんだところをとる」と言っているのが注目される。福田正夫は民衆派の詩人である。

ここに記載されている「箕部哲三」とは、どのような指導者だろうか。

雑誌『綴方教育』第三卷第八号(昭和三年八月)は「全国小学校児童文集誌上展覧会号」と銘打って全国の子どもの作品を掲載している。「九州地方」では十七点選ばれている。その中に宮崎県から恒富尋常高等小学校尋五級(詩「教室」森益行、「雪」松三郎)と並んで、清武尋常高等小学校尋五級の子どもの綴方が選ばれている。指導者名はないが、その作者が上記「松の木」の作者「大岩根政良」なのである。

一三 雲雀のかややぶ

府県名 宮崎県

学校名 清武尋常高等小学校尋五級

体裁 謄写版刷

内容 散文・詩

作品例 山ももちぎり

尋五 大岩根政良

昨日、僕がいちゆうくじよがすんでかへつてきました。すると町の山本君と境田君がぼんぶ小屋の前にゐました。僕が木戸にはいると、山本君がはしつてきて、

「山ももちぎりに来たから、つれていけ」といふのです。

僕はいそいでお母さんにたづねて、大きなかごを手に持つて走つて木戸に出てみると、山本君たちもいそいできました。それで、そろく行きました。そのうちにおうくわんからはづれて小さな小道をいつた。

まもなく、たくさんならんだ木の木が其所に見えだしました。木を見るとすこしもなつてゐないやうです。どうしたのだらうと思つて近よつてその木の下に行つて見ると、たくさん真黒い大きい木もが、そしてあえさうになつてゐます。笑ふまいと思つても笑はずにはおられません。

それで、なるだけいさぶらないやうに木にのぼつた。一番よけいになつてゐる場所のよいところへ僕はのぼつていつた。

あまりなつてゐるので、どんどんちぎつても少しもちぎつたやうではない。それでもかごを見ると半分ぐらいになつてきた。

みんなで話しながらちぎつてゐる中に、それでももちはだんくなくなつていつた。そしてかごにはぐわらぐわらおちるやうになつてしまつた。ももちぎるときにゆさぶるまいとおもつても、どうしてもゆさぶるので上から見ると、下の草やぶにもずいぶんおちてゐる。

かごからもこぼれる。しかたがないから皆んなで自分で食べるだけのをちぎつてゐると、遠い所から木を切る音が、

こたーん、こたーん……

と、小さくしづかにひびいてきた。

その音を聞いてから、かへりたいやうな気分になつた。

そこでみんなに

「もうぢきかへらうや」といふとみんなも

「かへらう」といつたから、先に下りて待つてゐると、みんなも下りてきた。

かごの中のものもをくひながらあるきだした。

「こたーん、こたーん」という、木を切る音が魅力的である。熟れた山桃がたくさんなつてゐるのを見て「笑ふまいと思つても笑はずにはおられません。」というのも、子どもの心をよく表している。

この綴方によれば、大岩根政良は「清武尋常高等小学校尋五級」の児童である。したがつて、「わな」の小城泰三も清武小学校の五年生であり、指導者は「箕部哲三」だということになる。清武小学校には、昭和二、三年には既に『雲雀のかややぶ』という文集があつたので

ある。「かやぶ」は「萱藪」であろう。

では清武小学校で綴方や児童詩の指導をしていた「箕部哲三」とは、どういう教師だろうか。

『宮崎県学事関係職員録』（宮崎県教育会編）の大正十四年版（七月）を見ると、清武小学校の職員は次のようになっている。

清武尋常高等小学校 児童数 六六五

学級数 一六

学校長

一〇〇 中村今朝蔵

訓 導 十三名（略）

准訓導 二名（略）

代用教員

三五 日野達夫

三〇 蓑部鉄蔵

二八 神田やへ

この代用教員の「蓑部鉄蔵」（筆者注、「鉄蔵」は旧字体）が「箕部哲三」なのである。「箕部」は誤植である。本名は「蓑部鉄蔵」、作品等の指導者名は「蓑部哲三」を使っていた。御子息の蓑部樹生氏も、「鉄蔵」は昭和三年にアララギに入会しているがその時からペンネームとして「蓑部哲三」を使っており、「箕部」を使ったことはないと言っている。指導者名としても他に「箕部」を使った例は無い。

蓑部鉄蔵は、大正十三年三月に旧制宮崎中学校を卒業し、同十四年三月三十一日付けで宮崎郡清武尋常高等小学校代用教員となり、翌十五年十月に正式に同小学校訓導となっている。昭和五年には第三宮崎尋常高等小学校に移っている。これらはこの間の指導作品である。

「松の木」（大岩根政良）、「わな」（小城泰三）は菊池知勇編著『日本児童詩の鑑賞と研究』（昭和十一年五月 文録社）に再録されている。指導者名は「箕部哲三」となっている。むろん「蓑部哲三」の間違いである。雑誌『綴方教育』での誤植を踏襲したのであろう。

『日本児童詩の鑑賞と研究』は「小学校に於ける児童詩教育の正しい道を開くために、最も必要な鑑賞材料を供給しよう」として編纂したもの（序）である。四月から三月までの十二ヶ月に分かれ、それぞれ尋一から高等科二年までの作品七十篇を収録している。全部で八百四十篇である。それぞれの作品に、詩人の福田正夫・正富汪洋・室生犀星・百田宗治・佐藤惣之助・井上康文・前田孝愛・中田信子・菊池ゆき、小学校教師の富原義徳・鵜澤寛・小原義正・磯長武雄・菊池知勇等が批評を加えている。

同書には前述した「松の木」（大岩根政良）、「わな」（小城泰三）のほかに、「朝の森」という作品が掲載されている。

（四月の詩）

朝の森

尋四 貴島政明

朝

うしろの森に行つた

あたまが

すうとすきとほる

（箕部哲三指導）

富原義徳 「すうとすきとほる」はい。

中田信子 「あたまが、すうとすきとほる」は実感をうたつたものでせう。たゞ少し大人びすぎてゐるといへば言へるやうです。もし指

導者の不自然な指導の結果でなくて、この作者のたゞひとりの知能からであるとすれば、とても気持ちのいいものといへます。

百田宗治 佳

福田正夫 わるくはない。すきとほるの気持はわかる。が、感じがなんとなくすい。

菊池知勇 「うしろの森に行つた」といへば、自分の姿を客観してゐるので、「あたまが、すうとすきとほる」といふ主観的な言葉がび

つたりつゞきません。したがつてこの二行目は「うしろの」をはぶき「行つた」を「来た」とかへて、単に「森に来た」とすべきです。

朝の森のさわやかさを「あたまが、すうとすきとほる」と言っているのだが、的確な表現である。中田信子からは、それ故に、指導者の手が入っているのではないかと疑われている。菊池知勇の指摘に従えば、題名に「朝の森」とあるのだから、最初の二行を除いて、「あたまが／すうとすきとほる」だけでも良いだろう。

これも清武小学校の作品だが、「貴島政明」は尋四となっている。「小城泰三」も尋四（昭和二年）と記されているから、貴島政明の「森の朝」も昭和二年に「綴方教育」誌上に掲載されたものなのだろう。文集『雲雀のかやぶ』は、尋五（昭和三年）の時のものであり、二人とも「尋五大岩根政良」と同級と思われる。

なお、菊池知勇は序の中で、「この本にとつてある各作品は、過去及び現在に於ける日本の小学校の児童詩の最高標準を示すべきもの」

と言い、「この本の内容は大正十五年四月から、昭和七年三月に至る満六ヶ年にわたつて『綴方教育』誌上に連載したものです。この本を編むにあつて更に厳選して、適当なものばかりとし、排列組織も全くかへました。」と述べている。青年教師・葦部哲三の指導も高く評価されているわけである。

四、平岩小学校の子どもの詩

1、百田宗治著『批評と添削 小学児童の詩』

昭和九年三月、百田宗治著『批評と添削 小学児童の詩』が厚生閣書店から刊行された。この書は、序によれば「児童詩の批評と添削といふことを目的として、主として直接児童の詩の指導に当たる人々のために編述され」たものである。収録されている作品は、「主として最近一ヶ年間に刊行された全国小学校の文集に拠り、更に、著者自身選評の衛に当つてゐる雑誌『綴り方倶楽部』に、各地の指導者を通じて寄稿された約三千余篇の作品から選び出したものをも加へた」ものだと「追記」にあるから、主として昭和八年頃のものだということになる。「尋常一年生の詩」から「高等科一二年生の詩」までの七部構成である。掲載された詩一つ一つに百田宗治の評が付いている。

ここに、土々呂小学校と平岩小学校の子どもの詩が再録されている。土々呂小は「尋常一年生の詩」「尋常二年生の詩」の部に、平岩小は「尋常五年生の詩」の部に掲載されている。指導者名は無い。土々呂小の指導者は木村壽である。昭和七年から九年まで土々呂小に在職しており、ここに再録された作品の著者である子どもたちの名前が木村の文集の子どもの詩と同一だからである（それについては「土々呂小学校の子どもの詩」で述べることにする）。

では、平岩小の指導者は誰だろうか。この本の巻頭には「かやきり」という作品がページに一篇という待遇で掲げられているが、それが平岩小の子どもの作品なのである。

2、巻頭詩「かやきり」(平岩小学校)

尾鈴山^{をすい}まで

はれた、

かや山^{かやま}、

お父^{おとう}さんが切ると

雪^{ゆき}のやうにふつてくる、

お母^{かあ}さんが切ると

雪^{ゆき}のやうにふつてくる。

り き や か

宮崎県平岩小学校作品
本文第二百十六頁参照

表紙と「序」の間に、「かやきり」はこういう形で一ページを割いて掲載されている。作者名はない。「本文第二百十六頁参照」とあるように、平岩小の子どもたちの作品の末尾に改めて掲載されているからである。名前を記さなかったのは、編者がそれだけ作品として高く評価していたからである。百田宗治は、作品のみを掲げることによって、純粋にこの情景の美しさを出したかったのだろう。作者は「溝口初知」である。

百田宗治はこの詩を、「本文第二百十六頁」で、次のように評している。

(評)

何といふ美しい詩であらう。詩の心も美しいし、多奇を弄しないで、同じ言葉を繰返してゐるのも何処やらにさし迫らぬ優雅さがあり、莊重でもある。観たまゝ感じたままを率直に書いたとか、巧みに書いたとか、或はまた綺麗に書いたとかいふだけでない、この詩にはほんたうの詩の美しさといふものがあらはれてゐると思ふ。

かういふ詩の美しさは、いふまでもなく、同時にかういふ詩を書いた心の美しさである。「尾鈴山まで晴れた」の起句に、まづ無所着への大きい宏い自然との融合があり、萱山の萱を

お父さんが切ると 雪のやうに降ってくる

お母さんが切ると 雪のやうに降ってくる

それこそ些の濁りのない、雪のやうな浄らかさを感じられる。かういふ質朴で、飾らぬうちに生地心の美しさの感じられる詩を読んでいると、はしなく思ひ出されるのはわが日本の記紀にも遡る質朴莊重な民族的詩的精神のそれで、その野外的な素朴の精神のあらはれの前には、肅然として襟を正さなければならぬものがあるやうに感ずる。この詩の中にあはれた父母の姿、親と子の私ならぬ情感の繋がり、不知不識にかういふ美しい詩の書ける日本の児童の恵まれた詩心を思はずにはゐられない。

形の上の些細な瑕瑾など拾ひ上げる要もない。筆者は新しい国定教科書の中に散見する大人の作つた擬童詩の代りに、かういふ純真無垢の真の日本児童の名に値する作品が抄録されることを心から希望する。

百田宗治が純粋に「詩」として心を揺すぶられたことがよく分かる評である。百田宗治の評の上に、これ以上、言葉を重ねる必要はないであろう。全国の児童詩の中でも屈指の作品である。後述するように、入江道雄は「形が完成的にまで整い過ぎて、もはや『自由詩』としての限界を、はやくも感じさせている。」と批評しているが、それほど完成度が高いということである。

他の子どもたちの作品は、次の通りである。

*尋常五年生の詩

はうたい

足のはうたいをほどいてあたら、
こどものころのことを思ひ出した、
「となりののはつちちゃんがたは
二階があるがうちにはない」
と言ったことを思出した、
おかしくなつて
ひとりであつた。

—宮崎県平岩校 根井深雪

(百田宗治・評)

女兒の作である。こゝに書かれてゐるかぎりでは、足の包帯のことと、それを見て思ひ出したといふ子供の頃(もつと小さかつた頃のこと)の自分の言葉との間には何の脈絡もなさうであるが、作者自身にとつてはこの間に何か記憶の繋がりがあるのであらう。かういふ作品を書いたときには、やはりそれをたづねて、その心理的な意識の繋がりを明らかにさせた方がよい。

一種の不具的な作品として、児童の自然の生活が生きくゝと出てゐるやうで、面白くは読んだが、このまゝでは困りものであると思ふ。

確かに百田宗治の言うように、足の包帯と二階との関係が見えない。「となりののはつちちゃん」が二階から落ちるなりして、足を折つたかケガをしたか、そうしたことが小さい頃あつたのかも知れない。

百田宗治の評は、このように具体的に問題点を指摘し、指導の仕方を示唆している。「序」で「指導者のために書いた」と言っていることと表れであらう。

なおこの詩は『綴り方倶楽部』昭和八年十月号に掲載されており、そこでは句読点は小さい付いていない。また「評」も子ども向けのためか、「このまゝでは困りものである」といった言い方はしていない。

* 『綴り方倶楽部』昭和八年十月号の「評」

足のはうたいをほどこいてゐたら、小さいときに、「おとなりのはつちやんのところには二階があるが、うちにはない」と自分でいつたことを思ひ出して、おかしくなつたといふのです。どうしてそんなことを思ひ出したのかそのところがわかりませんが、しかし自分ではわかつてゐるのでせう。綴り方ではそれも書かなければいけません、詩ではまあまあ構はないのです。それに反つてそんなことを説明しないで、おかしくなつたといふことだけを書いてゐるのが面白いのです。

ここでは詩とはどういうものかという点に力点が置かれている。「指導者のために書いた」評と、子ども向けに書いたものとの差である。

麦かり

麦かりよると、
うら山の杉
がうくゆれた、
ふりかへつて見ると、
麦の穂が
さらくゆれて来た。

―同校 黒木利通

（評）

纏つた境地が書いてゐる。「ふりかへつて見ると」以下の眼の転じ方も自然だし、書方も手馴れたものである。

「麦かりよると」は、麦を刈つてゐると、である。短歌的な構想が感じられる。それが全体を統率してゐるのもあらう。

これも『綴り方倶楽部』昭和八年十月号に掲載された詩である。「はうたい」と同じく句読点はいっさい付いていない。「評」は次の通りである。

* 『綴り方倶楽部』昭和八年十月号の「評」

麦かりよると、といふのは、麦を刈つてゐると、です。うら山の杉が、風がうぐぐと音をたて、ゆれるのにおどろいて、ふり返つて見たら、麦の穂がさら／＼とゆれて来るのが見えたといふのです。子供らしく書いてゐながら、これで立派な詩になつてゐます。このまゝで短歌にでもなりさうです。よく落着いて書いてゐます。

指導者向け、子ども向けという違いはあるが、言っていることは同じである。

なおこの後に、百田宗治の『批評と添削 小学児童の詩』では「鶏と火」（野村金秋）という詩が平岩小学校的の作品として挙げられているが、これは群馬県賽泉小学校のものである。『綴り方倶楽部』でも平岩小の作品の間に掲載されているので、百田宗治が誤つて入れたのである。

雨の日

雨の降る日、

傘をさして歩いてゐると

本宮店もとみやみせのガラスにうつる、

本宮店の品をけとばして

歩いてゐるやうにある。

— 同校 松田嘉一

(評)

本宮店といふのは商店の名である。傘をさして歩いてゐる自分の姿が、その店のガラスに映る、硝子越しに（或は硝子に映つた）その店の品物を蹴飛ばして歩いてゐるやうに見えるの謂である。「やうにある」は他にも例があり、この地方の特殊な云ひ現はし方のやうである。原始的で面白い。

見聞の躍如とした表現がなり、様態主義や観察偏重癖を蹴飛ばして書いてゐるのを愉快に思つた。

三行目「本宮店」の前に「自分の姿が」と入れさせた方がよい。

「雨の日」は、なかなかユニークな詩である。雨の日に傘をさした自分が店のガラスに写っている。その自分が店の品物を蹴飛ばして歩いてゐるやうに見える。まるで映画の一場のやうにイメージが鮮やかで、可愛らしい。子どもならではの視点である。

本宮店は今はない。病院の駐車場がその跡地である。平岩小に通じる旧道に面している。雑貨屋である。

朝

お日様の前を通る鳥

きらきら光る、

権現崎の波が

黒くて、

舟が

どんどん生れてゐる。

―同校 石原 敏

(評)

「権現崎の波が黒くて」は、その海が日蔭になつてゐるからであらう。これは「黒い権現崎の海」と一行に改めたら、状景がもつと広くなつて、「舟がどんどん生れてゐる」がもつと効果的になつたかもしれない。

眼前の日に照らされて光る鳥、日蔭の黒い海に散らばつてゐる漁船。「舟がどんどん生れてゐる」は如何にも実景的で、うまい描写である。期せずして光線の変化をよく捉へてゐる。

権現崎は耳川の河口、美々津の対岸にある太平洋を望む岬である。どういふ情景がよく分からないところもあるが、早朝、海から太陽が昇る、それも昇りきつたのではなく、水平線から顔を出した直後だろう。権現崎から海を見下ろすと、飛ぶ鳥が陽を浴びてきらきらと輝く。だが、手前の海はまだ暗く、黒く見える。その黒い海に漁をする何艘もの舟が波間に見え隠れする。

夜を徹して取った魚を積んだ船が次々に港に帰ってくるというふうにもとれるが、戦前生まれという地元の話では、当時はまだぼんぼん船ではなく、帆と櫓を附けた手こぎの船だったという。船ではなく、詩にあるように「舟」だったのである。今は獲れなくなったが、あの頃は鯛や鰯などが河口の沖合でたくさん獲れたのだという話だった。

黒い波間に、漁をする舟の帆が白く見え隠れするのであろう。百田宗治も「光線の変化をよく捉へてゐる」と言っているように、日が昇るに連れて「白い帆」が姿を現し、「舟が／＼とどんどん生れ」るのである。

この詩の後に、前述した「かやきり」が掲載されている。「溝口初知」という作者名を入れ、ルビ抜きである。

百田宗治は「序」の中で、「本書は、児童詩の批評と添削といふことを目的として、主として直接児童の詩の指導に当たる人々のために編述」したのであるから、ここに収録した作品は「いはゆる詩としての価値を基準として選出したものでなく、直接指導者が実際指導の上

で、屢々出合ふに違ひないあらゆる場合の作品を予想して、出来るだけ多面的な選択を第一義としたものである」と、教育的、指導的な観点から選出したことを強調している。

しかし、それでも「かやきり」は、詩人である百田宗治に、これこそ詩であると言わせずにはおかなかつたのである。そこまで百田宗治に言わせた「かやきり」を指導した人物とは、誰だろうか。

入江道雄はその著『児童生活詩形成史 上』（あゆみ出版 一九七九・一二）の中で、この「かやきり」を引き、次のように述べている。

『綴り方倶楽部』初期の特選作に木村寿指導の、次の詩が注目されていた。

かやきり

尾鈴山まで

はれた

かや山

お父さんが切ると

雪のやうにふつてくる

お母さんが切ると

雪のやうにふつてくる

（『光』）

晴れ澄んだ晩秋の萱山。こどもの感情は躍動している。背景の「尾鈴山」が、いかにも利いている。だが、韻文調のこの対句的な詩は、形が完成的にまで整い過ぎて、もはや「自由詩」としての限界を、はやくも感じさせている。

「かやきり」を木村壽の指導作品としているのだが、木村壽は平岩小学校に勤務したことはない。それに出典を『光』としているが、『光』は土々呂小の三年生の文集である。作者を尋常五年生としておきながら、出典を三年生の『光』としているのは、木村壽についても曖昧な知識しか持ち合わせていなかったとしか言いようがない。

ただ、入江道雄の言葉から、「かやきり」が初期の『綴り方倶楽部』に掲載され、特選で、注目された作品だったことが分かる。

『綴り方倶楽部』第一巻第七号（昭和八年）には、尋常五年生の詩として、宮崎・平岩校「麦かり」（黒木利通）「はうたい」（根井深雪）が載っているが、指導者名はない。

しかし昭和十年版『年刊 日本児童詩集』には、平岩小学校の子どもの作品に、指導者名として「養部哲三」の名がある。

筆者注 雑誌『綴方倶楽部』も現存しているものが少なく、「かやきり」等の詩が掲載されている号は見る事ができなかった。

3、平岩小学校の指導者「蓑哲部三」

昭和十年五月に、昭和十年版『年刊 日本児童詩集』（全日本綴方倶楽部編）が東宛書房から刊行されている。発行者は千葉春雄である。当時は文集の発行が盛んで、「刊行の趣旨」には「こゝに寄贈される文・詩集でさへ、昭和六年に於て八百七十二冊、昭和七年に於て一千四百九冊、昭和八年に於て二千百十六冊、昭和九年に於ては、二千八百七十四冊を数へてゐる。もつて、その盛運を窺知することが出来る。」とある。その盛運を受けて「日本全児童を代表する年刊文集詩集」として編まれたのが本書である。「未だ、日本に見ざる全土的結集である。この豪壮、この雄大、この合同は、正しく現代日本のもつ児童文・詩の一大摩天楼として、全世界に呼号していゝものである。」と書かれている。

昭和十年版とあるが、発行が昭和十年五月であることから分かるように、収録されている作品は主として昭和九年度に発行された詩文集等から採られた作品である。

「昭和八年の暮頃より、万端の準備と用意をととのへ、昭和九年即ち昭和九年四月より十年三月末迄に刊行された全国の文詩集中より、健康にして傑出せる作品を厳選し、かねて教育上、また研究上より見て、諸多の意義に富む作品を採択し、これを昭和十年版として刊行にとりかゝつた。日本及びその全領土は勿論、日本児童の存在する関係諸国をも網羅し、名実共に日本児童文・詩集の粹たるを期し、その代表たる事に該当するものを選出した。」（『刊行の趣旨』）

作品は尋常一年から高等科一・二年まで、「カタツムリ 尋一・作品集」といったように各学年毎に掲載されている。各学年は更に四月から十二月まで月別になっている。

この「海の中の岩 尋五・作品集」の十二月のところ平岩小学校の子どもの作品が載っている。

うちの馬

黒木祐男

宮崎県東臼杵郡平岩小学校

蓑哲部三指導

うちの馬は

もう十二年も

馬車をひいてゐる

去年の冬にし（眼から涙が流れること）をなきし（涙）てゐた眼が

見えなくなつた

今も馬屋から顔を出しながら
 眼から涙が流れてゐる
 僕ははみをきりながら
 馬の首をなぞなぞせてやつた

ここには指導者の名が記載されている。「葦哲部三」は、むろん誤植である。

ひなたぼっこ

児玉ツルミ

宮崎県東臼杵郡平島ヘイマ小学校

葦部哲三指導

がけの下にひなたぼっこをしにいった
 むしろをもつていった
 せきれいがのんでゐる水たまりがある
 青い草がのびてゐる

風の当たらない崖下にむしろを敷き、日向ぼっこをしている。鶺鴒が来て水を飲むような、美しい自然の中での、爽やかな、幸せなひとときである。

児玉ツルミの所属学校は「宮崎県東臼杵郡平島小学校」となっているが、宮崎県に平島小学校という学校はない。目次には「児玉ツルミ（宮崎平岩校）」とあるから、「うちの馬」と同じく平岩小学校の作品である。平岩小学校の指導者は「葦部哲三」である。

葦部哲三は昭和七年に、東臼杵郡岩脇村「平岩尋常高等小学校」に転勤してきている。児童数「四一九」、学級数「九」の、太平洋に面した学校である。

4、卒業者名簿に無い「根井深雪」

平岩小学校の卒業者名簿によると、これらの子どもたちは昭和九年度の卒業生である。昭和八年当時は、確かに小学五年生である。「かやぎり」（溝口初知）を指導したのは葦部哲三だったのである。

ただ、根井深雪の名前は卒業者名簿には無い。また、「雨の日」の作者「松田嘉一」は、「松葉嘉一」の誤記である。

卒業者名簿に名前の無い根井深雪の在籍状況を調べてみると、根井深雪は昭和八年三月に転出していることが分かった。つまり作品を書

いたとされる昭和八年度には、根井深雪は平岩小に在籍していないのである。根井深雪の詩「はうたい」は昭和八年度ではなく、七年度に書かれたことになる(養部鉄蔵が在職したのは七、八の二年間である)。

したがって、根井深雪の作品は尋常五年生のものということになっているけれども、実際は前年度、尋常四年の時の作品ということになる。詳しいことは分からないが作品が掲載された『綴り方倶楽部』が「昭和八年十月一日発行」であることを考えると、七年度末に書かれた根井深雪の作品を、次年度一学期の文集(昭和八年度)に採録したのであろう。

5、転校先の詩

昭和八年三月に平岩小学校から他へ転校していった根井深雪は、転校先でも詩を書いていたらしく、昭和十年版、昭和十一年版の両『年刊 日本児童詩集』に作品が掲載されている。「根井」という姓でも分かるように、もともと広瀬村(佐土原町)の出身であるが、父親が官吏とあるから転勤が多かったのであろう。平岩小学校から大分県の速見郡山香小学校に転校している。

草の芽

根井深雪

大分県速見郡山香小学校

芝尾寛次指導

野原を歩いてる

歩くたび

ぼそくとつぶれる音がする

枯草のかげ

草の芽ばつとわれてる

妹が後から草の芽

むしりくついてきてゐる

片手一ぱい草の芽もつてゐる

(昭和十年版『日本児童詩集』尋五・作品集)

牛

根井深雪

大分県速見郡山香小学校

〔芝尾寛次先生指導〕

泥まみれの牛

田をかいてゐる

のろろ行つては

草をたべる

たゝかれると

思ひ出したやうに急ぐ

どぶんどぶんと

泥水がかゝつてゐる

ふうふういふいき

こゝまできこえる

(昭和十一年版『日本児童詩集』尋六・作品集)

教師の芝尾寛次は熱心な指導者だったらしく、『日本児童詩集』に多くの指導作品が掲載されている。

五、美々地小学校の子どもの詩

1、養部哲三、美々地小への転勤

養部哲三は昭和九年に東臼杵郡北方村美々地小学校に転勤になっている。「児童数四六〇、学級数一〇」の山間部の学校である。

平成十五年現在、児童総数二十七名の僻地校であるが、かつては榎峯鉦山を擁し、賑わった所であった。同校の『創立一〇〇周年記念誌』(平成十二年三月)には、鉦山の最盛期である昭和十八年の従業員数は一〇四三名、生徒数は六七九名と記録されている。

養部哲三は、ここでもさっそく綴方・児童詩の指導を始めている。文集名は分からないが、昭和十年版『年刊 日本児童詩集』には、養部哲三の指導作品として、美々地小学校の作品が掲載されている。

「たいはうの花火 尋三・作品集」八月

川

持田ヒサ子

宮崎県東臼杵郡美々地小学校

蓑部哲三指導

川へ

担ちやんをむかひに行つたら

担ちやんはゐない

川の音が聞える

『ごはんつぶの神様 尋四・作品集』五月

五ヶ瀬川

梶井政子

宮崎県東臼杵郡美々地小学校

蓑部哲三指導

やとの渡し場は

水がいつぱいふくれてゐた

すこしゆくと

水がをらんで

さはいでゐる

川原の五年生の声

きこえてこない

いずれも蓑部哲三の指導であるが、持田ヒサ子は三年生、梶井政子は四年生となっている。

しかし美々地小学校の卒業生名簿では、昭和十一年度の卒業生に「持田壽子」「梶井政子」の名前があり、二人は同級生である。昭和九年当時、二人とも小三ではなく、小四である。

2、持田ヒサ子「川」への評価

昭和十年十月、『綴方生活』（第七卷第九号）で、「児童詩の動向・検討・示標」という特集が組まれた。田中平助はその中で「児童詩

に於けるポエジイのあり方―『日本児童詩集』小評―を書き、持田ヒサ子の「川」を取り上げている。「川」は『綴方倶楽部』（昭和九年十月号）で、「みなさんの詩」の推薦になつてゐる作品である。

田中平助は「主として児童詩に於けるポエジイをのみ問題としていさゝかの考察を加へたい」と述べ、『日本児童詩集』に掲載されてゐる詩の幾つかを例に挙げて批判している。

ぎりす

兄さんと二人で

らつきよをほつてゐると

そばでぎりすが

静かにないた

これに対して田中は「対象に対して積極的なる、意欲的なる感動の表出でないものは詩ではない」と評している。ほかにも五篇ほど引用して批評しているが、結論は同じである。

では田中の言う詩、「対象に対して積極的なる、意欲的なる感動の表出であるものとはどういうものか。田中は「最後に私は、私の最もよいと考へる詩教編をあげてこれに鑑賞批評を加へ併せて自己の詩観の表明としたいと考へる。」と、「川」のほか二篇の詩をあげている。

川

尋^マ三^マ 持田ヒサ子

川へ

担ちやんをむかひに行つたら

担ちやんはゐない

川の音が聞える

作者は川へ担ちやんをむかへに行つたのである。担ちやんはゐなかつた。ゐなかつたばかりでなく恐らくひとり一人ゐなかつたのである。そして休みなく流れるせゝらぎの音のみがあつた。そしてそのせゝらぎの音をきいてゐたのは作者だけであつた。最後の「川の音が聞える」に夕暮の自然の中にポツツリ置かれた自己の孤影をはつきりと浮び出してゐる。

美々地小学校の下を流れる実際の「川」は、「せせらぎ」というより、山奥の巨大な石がごろごろしているような川である。山と山に挟まれて流れる傾斜した川である。しかし「せせらぎ」かどうかはともかく、川音がする川である。その川音に「夕暮の自然の中にポツツリ

置かれた自己の孤影をはつきりと浮び出してゐる。」というのは、的確な捉え方だと言えよう。川に居ると思つて呼びに行った担ちやんがそこに居なかつたときの心情、居ることを予定していた人物が居なかつたが故に川の音が聞こえるのである。居れば川が音をたてて流れていても、それはいつものことで気にはならない。田中平助は「川の音が聞える」でそうした情感を表現し得ているところを評価しているのである。そこにポエジイを見ているのである。

あかんぼう

尋四 武藤健蔵

どうしてなくんだかわからない

めそめそ泣く赤んぼう

わけのわからない赤んぼう

お母さんの仕度が出来るまで

赤ん坊おぶつて通に出たら

工場の煙突が

パツパツと火を出してゐる

お父さんは夜業ではたらいてゐる

この詩に対して田中は、「これらの年頃の子どもが、その機嫌の悪い時は殆んどギヤアギヤアと泣く機械としか思へない嬰兒に対して発したこの大胆な非人間的感情が非常な真実性ある迫真力を持つてゐる。」と評価している。「わけのわからない赤んぼう」に対して抱く困惑と嫌悪感、その人間的な感情の発露に真実を見、この詩のポエジイを見ているのである。

馬 洗 ひ

尋五 平野 禎 吉

馬に乗つて

川に馬洗ひに行つた

洗つてゐると

馬車の音が上通から聞えた

馬は

急にヒヨンと耳を立てた

「自然の中に於ける同族動物の機微な感覚の動きを見逃さなかつた所に反つて作者の人間性をひそませてゐる。」(田中)
馬と殆ど一体化したかのような少年、その馬への愛情が、物音に敏感に耳を立てる馬の動きを見逃さず捉えているところに表れているのであろう。

これらの批評は、田中平助という人物の詩を見る目の確かさを思わせる。田中は以上を要約して「対象に対して単に情熱のない説明的叙述、或は受身的衝動的発作的感情、或は猫の耳的流動であつたのではそこによい詩を見ることが出来ない。而してこの三者の詩の如く対象に対して真摯に自己の人間の感情を担露した所に偉大なる詩を見出」すと言っている。三篇を、ポエジイを有する「詩」として見ているのである。田中に、最も良い詩の例として挙げられた「川」は、持田ヒサ子という子どもの資質とともに、蓑部鉄蔵という指導者の資質によるものでもある。

(補記)

後日、山口政子(梶井政子)さんにお話を聞く機会があつた。「蓑部鉄蔵」の話を切り出すと、「蓑部先生は詩の先生です。」という返事が即座に返ってきた。熱心な児童詩の指導者だつたことが分かる。「蓑部先生が来てからみんな詩やら作文を書きました。」とも言つておられた。どんな詩を書いたかは覚えていないとのことだつた。「五ヶ瀬川」も記憶にないとのことである。「持田壽子さんはよそから鉱山に来た人」だが、「川」についてはやはり知らないという。持田壽子は三菱関係の社員の子どまつたのであろう。

3、美々地小学校の綴り方

『綴り方倶楽部』昭和九年十月号には、「みなさんの綴り方」欄に美々地小学校の「ちやも」という綴り方が掲載されている。

ちやも

宮崎県東臼杵郡美々地小学校
尋四 溝 口 房 子

「ひよこが生れた。」

と言つて姉さんがよびに来ましたので、いそいで行つて見ると小さなひよこが、二匹黒い色ばかり生れておりました。かたちはにはとりのひよことおなじです。小さな声で、「びよく」といつて、親のそばをあちらちちらして、親の目をついたりするが、親はじつとして、のこりの卵をぬくめておりました。それからいつときすると、又二匹生れておりました。そのあくる日見ると、又二匹生れておりました。十入れのうち、六匹は生れませんでした。

箱をこしらへなければならぬといふので、姉さんやねえやたちが、まいと箱をよこにねせて、ものをきから板を出して、およそ幅四セ

ンチ、長さ四十センチのを、たくさん鉛筆ですちをひいて、のこぎりできしぎしひいて作つてゐますと、高木の番頭さんがちゆうもんを持つて来ました。そして高木の番頭さんが、

「やりませうか。」

と言ひました。お母さんが

「それではして下さい。」

とおつしやいました。高木の番頭さんは前とおんなじやうに、えんぴつですちをひいてはのこぎりでひき、すちをひいてはのこぎりですちで出来上りました。見るといりぐちは上げるやうになつてゐました。

ちやもはとりごやのはこの中にはいつてゐました。姉さんがとりごやに入つておふと、めんどりがさきにとび下りて外へ出て来ました。

それで新しい箱に入れました。ねえさんがひよこを二匹づゝつかまへて、こやの外へ出しました。おやは又出て来て、ひよこをつれて箱の中へはいつていきました。

昼のうちには、ひよこは親の腹の下からはなれますが、夕方になると、すぐ親の腹の下へもぐりこみます。夜は内のはいり口の外から向つて右においてありますが、だいぶんひよこが大きくなつたので、こんどはちやものこやに箱ながら入れてあります。

ちやものこやをあけて、その中に入つてゐるめんどりとひよこの箱をあけてみると、ひよこのしりつぽが少し上つてゐました。お母さんが、

「ひよこのしりつぽが少し上つてゐるね。」

とおつしやいました。私は、「ほんと。」

といひました。

「もう三四日すると、出してもよからう。」

とおつしやいました。私はお母さんが、ひよこを出して下さいなのが、待ちどうしゆうございました。

待つてゐると、三四日も来ましたので、いひますと、出して下さいました。めんどりやひよこは、今まで小さな箱の中にあつて、めんどりはくるしかつたでせう。出してやると、うれしやうに、ひよこをつれてあちらこちらしてゐました。私は、

「かはいね。」

といひましたら、お母さんが、

「なつばを持つておいで。」

とおつしやいましたので、私はすいじばの下から持つて来てやりますと、めんどりがさきにたべて見せると、ひよこはあつまつて来てたべます。めんどりがたべやめると、ひよこもたべやめします。ひよこはめんどりの行く所についてゆきます。その中から一匹のひよこは、小さな蟻をみつめてたべてゐました。私は（あんな小さな蟻をみつめてたべるからね。）と思ひました。又親につれられて、庭をあちらこちら

してゐました。とりごやの左にすこしあいてゐる所に、とりごやから出せば、すぐいつて見えないので私はとりごやのそばに立てかけてあつた板を取つて、そこにはいられないやうにしてゐると、めんどりがそこに上つたので、それがたほれました。その時、おんどりとめんどりとひよこがいつしよに鳴きました。それを見て、お母さんが、

「そんなことをするからとおつしやいました。」

此の頃はとりごやがやかましくなつて来ました。お母さんが、

「ひよこを出す時には、ねこにとられてはいけないからついでゐないといけないね。」

とおつしやいました。この頃では一日に一ぺんは出してやります。だれでも出すと、すぐゑさをやります。ゑさをたべてしまふと、水の流れてゐないとすぐどぶの中へはいつて、ぼうぶらをたべます。さうしていつとき出すと、又とりごやの中に入れます。犬やねこがくるとおんどりとめんどりが、大きな声で長く鳴くので、すぐわかります。けれども、犬やねこの来たやうになくので、いつて見ると何も来てゐません。私たちにうそをおしへる時もあります。いつかの夜には、犬がとりごやの出入口の下の方をこわしてゐました。夜ゑさをやつてゐると、犬やねこがとりに来るので、夜にはゑさをやりません。

(養部哲三先生指導)

「ちやも」評

一、かなり長い綴り方です。でも、ごたごたしないで、よく書けてゐます。はじめの方から、順にみていきます。

二、小さいひよこが、二匹黒い色ばかり生れてゐました。

の表し方は、まづいと思ひます。

小さな黒い色のひよこが二匹生れてゐました。

とか、

小さなひよこが二匹、黒い色のむくむくした毛につつまれて、生れてゐました。

とか、いつた方が、はつきりします。

三、ひよこが、ちよこちよにあるいたり親の目をつついたりするところはよろしい。

四、十入れたうち、六匹は生れませんでした。

は、おかしいです。

おねえさんにはれて見た時に二匹。いつときしてから二匹。そのあくる日に二匹。みんなで六匹生れた筈です。だから、十入れたのなら、四匹だけ生れないので、六匹ではないでせう。

五、箱をこしらへるところで、鉛筆で筋をひいて鋸で切ったり、番頭さんが手伝ったりするところは、よく書けてゐます。が、どんな箱を作ったのか、よく分からないのが残念です。鋸で切ったところは、箱のどこにしたのか、はいり口は箱のどこにつけたのか、上げるやうになつてゐたといふのは、どういふふうにして、さう作つたのか、さうした箱の作り方が、はつきりしません。これは、板の幅が何センチで長さが何センチなどといふことより、もつともつと大切です。ただ、板の幅や長さを計るだけなら、誰にでも出来ます。誰にでも出来ることを書いたからつてえらいことはないのです。それより一個の箱で鳥のはいる箱を作つた、どこを入り口に、どこに入り口を作り、どうして作つたか、等を、はつきり分るやうに書く苦心をする方がどれほど大事か分からないのです。さうした現し方の苦心をしてこそ、綴り方のほんとの現し方の苦心をしたといはれるのです。

六、ひよこのしりつぽが上つてゐるね。
などと、細いところに気がついてゐるのは、よいと思ひます。

もう三四日すると出してもよからといふのと、どんな関係があるのか考へてみて下さい。

七、あんな小さな蟻を見つけてたべからね。

とひとり言をいつたことなどつけ足したが、大へんこのところを、生々とさしてゐます。

八、犬やねこが来るときの鳴きごゑのちがふことを書いたのもよろしいと思ひます。夜多さをやらないわけを書いたのもよいと思ひます。九、二つ三つ、考へ直していただきたいと思ふことを書きましたが、大体、よく意味の通る、そして、のびのびした綴り方です。こののびのびしたところが良いと思ひます。思ふことを、見たことを、伸び伸びとぐんぐん書いていただきたいと思ひます。

ずいぶん長い評である。「小さいひよこが、一匹黒い色ばかり生れてゐました。」は、国語の勉強としては評者の言うとおりで、表現としてはこの方が面白い。箱の作り方についても細かすぎる感じがするが、物を正確に見、正確に表現する態度の指導でもあるのだろう。なお、この号には、「みなさんの詩」に佳作として、「砂けむり」(谷口幸子)が載っている。

砂けむり

谷口 幸子(尋四)

宮崎県東臼杵郡美々地校

〈養部哲三先生指導〉

一年生のだんくの所に
砂けむりがたつた
うづまきのやうにまはつて行つた
一年生のくつの上を

(評) 三行目を「うづまきのやうに」で切り四行目を「一年生のくつの上をまはつて行つた」とした方が素直でよい。

「だんく」は「段々」で、校庭から教室にあがるための低い階段のことである。そこに一年生の靴が脱いであったのだろう。四行目は倒置法にして詩らしくしたのだろうが、「評」で言うように効果的とは言えない。

3、蓑部鉄蔵(哲三)の退職

蓑部鉄蔵は、大正十三年三月に旧制宮崎中学校を卒業し、同十四年三月三十一日付けで宮崎郡清武尋常高等小学校代用教員になっている。昭和七年に平岩尋常高等小学校訓導、同九年に美々地尋常高等小学校に転勤してきたことは前述したとおりである。

ところが蓑部鉄蔵の名は、昭和十年には職員録から消えている。昭和九年十月三十一日付けを以て退職しているのである。記録には『小学校令施行規則第二百二十六条第二号後段』によるとあるから、病気である。腰椎カリエスを病んでの退職である。

蓑部は昭和三年にアララギに入会しており、若い頃から短歌を創っていた。後に編まれた歌集『黄道光』には、次のような歌が残されている。

退職をすすめに来しと知りしとき思はず膝に涙落ちたり

昭和九年の歌である。当時二十七歳の青年教師だった蓑部は、腰椎カリエスにかかり、退職を勧告されたのである。蓑部樹生「蓑部哲三・歌の世界」(「みやぎの自然」二十号)には、「美々地に赴任して間もなく腰椎カリエスを患い、病気の悪化でその年の十月に退職。これより三年以上をその療養に費やす。」とある。後年「あの病気がなければずっと教師を続けていた」と語っていたそうである。

4、蓑部哲三の指導法

蓑部哲三が小学校でどのような指導法を取っていたのか、文献が残っていないので具体的には分からない。しかし教壇を離れても児童詩への思いは消しがたく、自分の子どもたちが小学校に上がると、詩の指導をしていたようである。蓑部樹生氏によると、子どもの頃、兄弟揃って詩を書き、それを「子ども朝日」等に投稿して何度も賞品を貰ったという。最初は嫌だったが賞品を貰つたりすると嬉しく、それが励みにもなり、また指導した父親を力のある人だと思ふようにもなったとのことである。その指導法は、子どもの書いてきたものを見て添削し、書き直させてまた見る、子どもが納得するまで話し合いながらの添削だったという。「思ったまま、見たまま、感じたままを素直に書く」と良い文章、良い詩ができる」と教えられたそうである。自分の子どもと学校での指導には若干の違いはあるだろうが、基本的には考

え方も指導法も同じであろう。

養部哲三の指導作品は「かやきり」に代表されるように、感性豊かである。それはとりもなおさず指導者が豊かな感性の持ち主だったことを意味する。この「子どもが納得するまで話し合いながらの添削」は、指導者の感性に基づく意見を「子どもが納得するまで話し合う」の意味であろう。結果的に子どもたちの作品は、指導者の豊かな感性を反映したものとなる。養部哲三は自分の感性をよりどころに、子どもたちに物の見方、表現の仕方、詩とは何かを教えていったのである。

5、養部哲三

病と短歌と

退職を余儀なくされた養部哲三は、その後三年余の療養生活を経て「裁判所書記・登記事務取扱」をしていたが、晩年もまたリュウマチに苦しむことになる。

年長くカリエス病みき老に入りてまた頑なりウマチを病む (昭和四十五年)

偽らざる心境であろう。年若くして腰椎カリエスを病み、老いてはまたリュウマチにかかり痛みに耐える日々である。理不尽な思いだったに違いない。

薬利かず手足も首もただ痛し老の病は吾をさいなむ

痛みに眠れぬ夜、もともと好きだった星を見る。星の歌も数多く残されている。

臥りつつ夜となりたるまくらべの窓にさやけし黄道光は (昭和五十六年)

いく月と限られし世に在る吾に紅梅の花も桃も美し

昭和五十六年一月、急性肺炎により養部鉄蔵永眠。

六、北原白秋編『日本幼児詩集』と蓑部哲三

↳ 『日本幼児詩集』における蓑部秀司について

北原白秋編『日本幼児詩集』（昭和七年四月 采文閣）に、宮崎の子どもの詩が二篇掲載されている。これについては既に拙稿「宮崎県における『赤い鳥・児童自由詩』の展開」（宮崎大学教育文化学部紀要教育科学九号）の中で触れたが、作者（と言っても口頭詩）の「蓑部秀司」と蓑部鉄蔵の関係について若干述べておきたい。

松まつ
風かぜ

宮崎 蓑部秀司

松まつの木と

松まつの木と

松まつの木。

てんで風かぜが鳴なりよる。

こうこうと鳴なりよる。

ひなた
日向ひなたの坂道さかみち

宮崎 蓑部秀司

ひなた
日向ひなたの坂道さかみち、

お尻しりがほやほや、

せなかがほやほや。

蓑部哲三には蓑部秀士という末弟がいる。蓑部秀司は「蓑部秀士」なのではないか。「蓑」は「蓑」である。「秀士」は本名「ヒデジ」であるが、音読みすれば「秀司」と同じである。これまで見てきたように、「士」が「司」になるくらいの間違いはこの当時はざらである。宮崎には蓑部姓は少ないことから確率が高いと思われる。

この詩集は、「解題」によれば、大正十一年から昭和六年にかけて書かれた幼児の詩を集成したものである。主として雑誌「コドモノクニ」に抛り、これに白秋の提言に共鳴した保育者たちから集められたものや「単行の詩集として上梓されたもの」から白秋が「選抄して加へたもの」など、「七章三百八十五篇」を収録したとある。後述するように、蓑部哲三は「赤い鳥」を購読していた。白秋の「コドモノク

二」に関心を寄せていたとしても不思議ではない。末弟・蓑部秀士は大正十二年三月三十一日生まれである。秀士が満二、三歳の頃、蓑部哲三は十八、九歳でちょうど清武小学校に勤務し始めた頃である。幼い弟のつぶやきを書きとめて投稿したとしても、少しもおかしくない年齢である。前述したように、蓑部哲三は昭和三年には清武小学校で文集を出しており、早くから児童詩を指導していた。であれば、尚更関心もあつたはずである。白秋が「大正十一年から昭和六年にかけて書かれた幼児の詩を集成した」とする年代にも合っている。後年自分の子どもたちに詩を書かせていたことから、「蓑部秀士」は「蓑部秀士」であり、弟の言葉を詩として受けとめ、投稿していたと考えられる。

「赤い鳥」には蓑部哲三の名は出て来ないが、蓑部が「赤い鳥」を読んでいたことは樹生氏が証言している。氏は、子どもの頃みかん箱一箱くらいの量の「赤い鳥」があつたと言っている。蓑部は北原白秋に関心を寄せていたのである。

なおこの末弟「蓑部秀士」は戦争で足を負傷し、それがもとで片足を切断したとのことである。昭和三十五年に亡くなっている。

補記

(一) 『綴り方倶楽部』で確認できたのは、以下の作品のみである。

※『綴り方倶楽部』昭和八年十月号

詩 「麦かり」 宮崎・平岩校 黒木利通

詩 「はうたい」 宮崎・平岩校 根井深雪

※『綴り方倶楽部』昭和九年四月号

詩 「ひなたぼっこ」 宮崎・平岩校 児玉ツルミ

※『綴り方倶楽部』昭和九年五月号

詩 「うちの馬」 尋五 宮崎・平岩校 黒木祐男

※『綴り方倶楽部』昭和九年十月号

綴方 「ちやも」 尋四 宮崎・美々地校 溝口房子

詩 推薦 「川」 宮崎・美々地校 持田ヒサ子

佳作 「砂けむり」 宮崎・美々地校 尋四谷口幸子

(二) 日本作文の会編『日本の子どもたちの詩 宮崎』(昭和五十八年六月岩崎書店)の「1918 (大正七年)〜1945 (昭和二十年)」には、「うちの馬」(黒木祐男)が収録されている。しかしここには「黒木祐男 小4」とあり、指導者名も末尾に「東臼杵郡美々地校 (指導) 蓑部哲三」となっている。

また「持田壽子」の学年を「小3」とし、「梶井政子」の名前を「堀井政子」と誤記している。

七、西臼杵郡の子どもの詩

↳上野小学校・押方小学校・鞍岡小学校↳

『昭和十年版 年刊 日本児童詩集』（全日本綴方倶楽部編）には、前述した美々地小学校・平岩小学校のほかに、上野小学校（佐藤実指導）、鞍岡小学校（山崎梅夫指導）、北郷小学校（今村十三郎指導）、土々呂小学校（木村壽指導）、第六宮崎小学校（椎葉重人指導）の子どもたちの詩が掲載されている。

また、翌年刊行された『昭和十一年版 年刊 日本児童詩集』には、押方小学校（佐藤実指導）と第七宮崎小学校（阿萬祥吉指導）の二校の名が見える。

ここではまず、西臼杵郡の小学校である上野小学校・押方小学校・鞍岡小学校から見ていくことにする。

（一）上野小学校・押方小学校

↳佐藤実の指導↳

1、上野小学校への赴任・文集「芽」の発行

上野小学校と押方小学校の指導者は、「佐藤実」である。「実」は「ジツ」と読む。

佐藤実は昭和六年に、宮崎師範本科第一部を卒業し、西臼杵郡上野尋常高等小学校（高千穂町）に赴任している。十年版『年刊 日本児童詩集』に掲載されたのは、この上野小での指導作品である。

おとうさん

馬原重利

宮崎県西臼杵郡上野小学校

佐藤 実指導（芽）

おとうさんが

ばしやひきからかへつてきた

のこくづのあせが

ながれてゐる

上野村は農業や林業を^{なりわい}生業とする村であった。この子の父親は、馬車で原木を出す仕事をしていたのである。木を切って運び出した時の

鋸屑が、汗にまみれた体に付いていたのだろう。

上野尋常高等小学校は、児童数七二九、学級数一四という学校である。

上野尋常高等小学校

西臼杵郡上野村大字上野

児童数 七二九

学級数 一四

訓導兼学校長

九〇 田口 益弥

訓導

六二 佐藤 圭一

五三 江藤 昇

五三 佐藤 武男

五三 後藤 勝美

五三 矢野 兎美雄

五〇 興 柁 照

四八 中島 保

四八 佐藤 イソ

四五 佐藤 實

四三 田邊 芳馬

四三 鳥越 栄

三八 佐藤 マツ

三六 稲葉 富

三六 佐藤 露

三六 戸高 マツエ

(昭和九年度版)

佐藤實は、昭和六年から九年まで、この上野小学校に在職している。いつから綴方指導を始めたのかは定かでないが、それが明確な形で

現れるのは、昭和九年度、三年生（男組四十四名）の担任になってからである。上野小最後の年だが、文集『芽』を発行しているのである。前述した「おとうさん」もこの文集に掲載されたものである。

『芽』は各学期一冊、計三冊からなっている。欠落している部分もあるので正確なことは分からないが、目次によると、一学期が全百三十二頁、二学期が四十六頁（目次不明）、三学期は九十二頁（現存六十二頁）である。同じ年に宮崎師範を卒業し、同じ西臼杵郡の鞍岡小に赴任した山崎梅夫が出していた文集は、「西洋紙十二、三枚を紙よりで閉じこんだ文集」（木村壽『今村君と私』）だったそうだから、これに比べると、山間部の文集としては、立派な物だったと言えよう。

そうした文集が昭和九年になって発行できたのは、児童の保護者で医者である江藤秀雄が、文集を出す費用を負担してくれたからである。当時、この病院にはちょっとした図書室があり、村の青年や子どもたちに開放していた。御息の江藤博方氏によると、昭和三年、昭和天皇即位の御大典を記念して病院を新築した折り、玄関の横に一室取って図書室を設けたのだという。村には本が少なく、剣道をやっていた秀雄の元に集まってくる青年たちのことを考えて、講談本など大人向けの本・雑誌が多く置かれていた。それに混じって世界文学全集や日本の名作等があった。

文集「芽」には、江藤博方氏の「詩日記」が載っているが、その十二月三日には「幼年倶楽部九月号といふ本が机の上においてある。あけたら、うさぎのもちつきのみがかいてある。」とある。九月号の表紙には、芋掘りの絵が描かれている。学生帽をかぶった男の子が芋を掘っており、側に、左手に芋を持って高く掲げた女の子が立っている。江藤博方氏は、月極で雑誌を取っており、毎月楽しみで、郵便局まで取りに行っていたそうである。

友人の興柁弥寿彦氏は二歳ほど年上だが、学校帰りに寄って少年倶楽部等を読むのが楽しみで、学校に行かずに図書室に行きたかったほどだったと言っている。医院の子どもたちが読んだ雑誌も図書室にまわして、村の子どもたちが読めるようにしていたのである。読書好きの子どもたちにとって、江藤医院の図書室は魅力的な所だったようである。江藤秀雄は、こうした人物だったから、佐藤実の文集発行にも理解があったのであろう。

これ以外にもたびたび寄付していたようで、文集「芽」には、次のような「お知らせ」が載っている。

「江藤秀雄様（雲井郡のお医者さん―江藤博方君のお父さん）から、みんなの読物を買ってくれと、たくさんのお金を下さいました。昭和九年一月号から、佳い綴方といふ本を、半年間とります。心からお札をのべませう。これで、一月から二冊づつ、綴方の本が読めるわけです。」

昭和九年とあるのは「昭和十年」の間違いである。この「お知らせ」によれば、既に綴方の本を一冊子どもたちに読ませていたようだが、それが何であるか、残念ながら分からない。江藤博方氏も覚えていないという。

いづれにしろ、「読物を買ってくれ」と多額の寄付を受けて、物語ではなく、「佳い綴方」という綴方の本をもう一冊取って子どもたちに読ませようというのである。佐藤実の綴方に対する思い入れのほどが分かる。

「佳い綴方」は、慶應幼稚舎の訓導であった菊池知勇が主宰していた雑誌である。日本初の綴方教育専門誌と言われる「綴方教育」(大正十五年創刊)の、いわば子雑誌である。「綴方教育」が教師向け、「佳い綴方」が子ども向けである。

佐々井秀緒はその著『生活綴方生成史』(あゆみ出版)の中で、雑誌『綴方教育』から『綴方生活』(昭和四年創刊)へと移行していく当時の状況について、次のように述べている。

じつは、この雑誌が出る以前には綴方教育の専門雑誌といえ、日本綴方教育研究会の准機関誌として一九二五年創刊の菊池知勇主宰『綴方教育』があるだけであった。したがって綴方教育に関心をもつ教師の多くはこの雑誌の読者であり、実践報告者、論文執筆者としてこれに拠っていたものである。

主宰者菊池知勇は、歌人若山牧水の『創作』同人として活躍し、口語歌を唱えるなど革新的な短歌運動をしてきた人物である。そのためかこの雑誌には、短歌に心を寄せる教師がかなり多く集まっていた。ところが新雑誌『綴方生活』が創刊されたのを見たこれらの教師は次々と『綴方生活』へと移動を始めたのである。それにはそれだけの理由があった。すなわち菊池の歌人的資質から出た一種の甘さ、つまり文芸趣味的傾向が強く、「佳い文」を作り出すための表現指導主義に走り過ぎること、それゆえに現実重視の態度を欠き、社会現実とのかかわりのない方向へ進んでいたことへの空しさに気づいた良心的な教師たちのレジスタンスであったと言えよう。(百十二頁)

佐々井秀緒は自身が生活綴方の立場にあった教師であるから、『綴方教育』から離脱した人々を「良心的な教師たち」と呼んでいるのである。むしろ子どもたちの置かれた現実(悲惨な)に目を向け、問題の解決に努力したという意味合いも含んでいるのであろう。

佐藤実が生活綴方についてどう考えていたのか、資料が残されていないので分からないが、二学期の文集「芽」には、菊池知勇の影響を思わせる文章が載っている。

短詩について

先生

「はっ」と感じたころもち、「あっ」とおどろいたころもちを、そのまゝの短いことばであらしたものを、短詩といひます。ことばは短い、ころもちはなく、深いのです。するどいのです。東京の菊池知勇先生の学校の尋三の生徒のうたった短詩を、三つ四つかりませう。

- ① 日の出だ、木の葉がゆれてゐる
- ② 朝日に光つてゐる鏡
- ③ カーテンにかがやいてゐる冬のお日様
- ④ 木のかげをとんぼがとんで行く

今から、短詩も作ってもらひませう。

ここでは菊池知勇の指導した作品を例としてあげている。今日から見れば魅力に乏しい作品であるが、こうした短詩を作らせようとしたのは、自分自身短歌や俳句に興味があったからであろう。

佐藤実が「佳い綴方」を子どもたちに読ませようとしたのは、菊池知勇が若山牧水の門人だったことも関係するのも知れない。しかし、佐藤のすぐ下の弟である佐藤正男氏は短歌や俳句もやる人だが、佐藤実が短歌をやっていたかどうかは覚えがないという。ご自身がまだ短歌や俳句にまったく興味なかった頃なので、気がつかなかったそうである（佐藤正男氏は平成十五年現在、八十八歳である）。

上野小学校創立百周年記念誌には、坂本邦雄氏の「想い出ずるまま」に佐藤実のことが出てくる。「三年担任は、佐藤実先生（三田井出身死亡）若くて小柄な先生でした。文学をこよなく愛し、俳句・詩歌を作ることを、よく指導して戴きました。その頃編集しました『芽』という詩集が残っています。」

佐藤実が短歌や俳句をやっていたか否かはともかく、児童にも文学好きな先生として映っていたのである。佐藤実はマンドリンもやっていて、創立記念日には他の先生たちと演奏したそうである。菊池知勇の影響を受けたのは、佐藤自身芸術好きということもあつたことだろう。しかしそれは一方では、佐藤実の指導作品（児童詩）が子どもたちの生活を捉えながらも写生的な描写にとどまっていることと、深く関係しているように思われる。

2、文集『芽』

前述したように、文集『芽』は三冊から成り、一学期が百三十二頁（現存百二十六頁）、二学期が四十六頁（現存）、三学期は九十二頁（現存六十二頁）である。むろんガリ版刷りである。挿し絵も佐藤実の自筆である。内容は、綴方、詩、童話、観察日記、手紙文などで、それぞれに細かな評がついている。他に、佐藤実の「詩話」「文話」等がある。参考までに、「もくじ」を記しておく。

*一学期

心配（6ぺん）	一
おくやみの文（4へん）	二六
詩 その一（14へん）	二九
遠足（6ぺん）	三五
病気の友へ（6ぺん）	五四

会話文(2へん)	五八
童話(3へん)	六二
詩 その二(23へん)	六九
詩話(2)	七五
不思議に思ったこと(5へん)	七七
前、自分と同じ机に居た	七七
友へ(7へん)	八七
働きの綴方(2へん)	九四
いろくの文(4へん)	九九
くわんさつ日記(4へん)	一〇九
文話	一二三
詩日記(1へん)	一二四
短詩について	一二六
尋三女生のうたつた詩	一二七
(7へん)	一二七
よその生徒のうたつた詩	一二九
(9へん)	一二九
詩話(1)	一三三
あとのことば	一三一
おしらせ	一二二
*二学期		
雨のつどり方(2へん)	三
働きのつどり方(5へん)	八
くわんさつ日記(1へん)	二七
詩(19へん)	三三
病気の友達へ(3へん)	四三
ことば	四六

*三学期

はじめのことば	一
芽のしらべ	一
火事(きめられたたいの文)	一一
詩(その一)	三四
年の晩・お正月をのぞく	三九
詩(その二)	六三
いろ／＼の綴方	六七
手紙の文	八四
あとのことば	九二

(綴方の指導)

綴方には「きめられた題の文」と「すきな題でつづつた文」とがあり、「評」において、表現面の指導と、生活・倫理面での指導がなされている。

*きめられた題の文 心配

本をひろつたこと

戸高 崑

うちにをりましたら、外でさわぐこゑがしますので、行つて見ますと、子供の小さい子たちが、遊んでゐました。

すると、子供が、のりちゃん所の下さね行つてしまひましたので、下さね行く道を行きましたら、本がおちてゐました。

本をひろつて見ましたら、一銭の、のらくろの本でした。それをよみましたけれども、おもしろくないので、うちのいかな下になげこみました。

「だれかみちよつたならおごらすが」と思つてゐましたら、橋の上から、だれかきよらしたから、「おごらすのか」と思つたら、づつと通つて行かれたのでよかつた。

さしきへかへつて、「おごらすきにやいゝが」と思つて、「もう外にはいかなぞ」と思つた。

かきちぎりに、うちの下さね、おづ／＼して行きました。ちぎつてから、いんで見ましたら、うちにもちぎつてありました。

その本は、となりの、のりちゃん所の、とうちゃんがんでした。のりちゃん所のばあさんは、まあおごらすから、ひつたまがつちよつたら、いちべおづくなつたので、うちにをりました。

うちのざしきで、ねてかんがへてみると、「あげんこつをしたたら、おほこつになるき」と思つて、「もうしない」と思つて、立つて行つてしたんでんまざね行ききました。

火をぬくんであましたら、はるちゃんが来て、

「あずばんかい」といつたので、出て行きました。みんなで遊んであましたら、一人が「せんぞ」といつて、みんなちらばらになりました。又、「いみりおにこつせんかい」といつてあましたら、ちつとあつまりました。

「みんながあとからわり口をいふから」と思つて、わあざくやられました。そばに、にげてきたやつだけやりました。みんなやつてから、

「二ばん目のおには、だれかい」

ときいたら、もう、うちきはじめましたから、にげました。

本をうしてたことを、わすれてあました。

一時したら、本をうしてたことを思ひ出しました。ちつと立つてあましたら、おにが来て、やりました。

「おれは、もうせんぞ」といつて、いになりました。

それから一時たつと、くらくくなりました。ごはんをくて、すぐねました。本のことをいろくかんがへだすと、

「ひろつて上げちよかにや」と思ひました。

けれども、「のりちゃんが、いつか本をなげたことをしつて、おごるかもしれん」と思つて、ねてみただけでした。

文集の最初に載っている綴方である。本を拾つて、読んでもおもしろくなかつたので床下に投げ込んでしまった子どもの、鬱々とした心がよく出ている。

これに対する佐藤実の「評」は、細かくて丁寧である。この綴方のどこが良いのか、具体的に指摘している。

評

① しんばいした心が、大へんよくあらはれてゐます。文の心を、はつきり出すことは、大へん大切なことです。

② 「しんばいした」といふ言葉を書かないで、色々、くはしく考へたことを、その通りに、じゅんじよよく書いてあるから、しんばいした心が、はつきりと出てゐるのです。本をすてた所、ざしき、柿取に行く時、ざしき、下の間、おにごつこをする時、ねた時、と

いふじゆんじよに、考へたことが、よく書いてあるでせう。

③ おにごつこをする中に、本をすてたことを思ひ出して、ぼかんと立つてゐたので、おにが来てやつた所など、よく忘れずに書いてあります。「おれはもうせんぞ」と言つて帰つた所など、よほど、しんばいしてゐたのでせう。

④ もし、方言が、もう少し少かつたら、それこそ大した文です。峯君の文には、少し方言が多いやうです。

翌日、本を拾つてかへしたかどうか、知りたいものですね。拾つてかへしたなら、峯君の心は、うんと善くなつてゐるでせう。

表現面の指導で目に付くのは、「方言を少なくするように」ということである。この評でも「もし、方言が、もう少し少かつたら、それこそ大した文です。」と言つているが、他の所でも再三注意している。「赤い鳥」綴方での方言許容とは対照的である。文部省の方針に添つた、学校全体での標準語教育への取り組みかとも思えるが、江藤博方氏によると、学校の日常生活で方言を使わないように指導されたことはないという。であれば、綴方における佐藤実の考え方である。

「方言が多いことは、前にも言ひましたね。しぜんに、なほして下さい。知つてゐるだけで、いゝのです。文が、うんと、よくなります。」方言を全面的に否定しているというより、方言が少ない方が読みやすい、分かりやすいということなのだろう。むろん、方言の面白さに気づいていなかつたわけではない。

遠足でべんたうをたべたこと

坂本 邦雄

かやのねもとで、べんたうをたべた。

私と正男君と鼻君でべんたうをたべた。鼻君が

「かつひこ君、こゝでくおだ」

と言つたので、私と正男君で、おゆなるとおもしろくないので、

「もういふな」

と言つた。鼻君が、

「山の神様に、飯を上げておこだ」

と言つた。けれども、私と正男君は上げなかつた。鼻君の飯はしら飯、正男君の飯もしら飯であつた。私のだけが、まぜ飯であつた。正男君のさいは、いわし一びきであつた。鼻君のさいは、こんこのさいであつた。正男君も山の神様に飯を半分上げたから、私も半分上げた。

けれども、ちつともくはつさんから、「さいがないからだらう」といつて、みそづけを上げた。けれどもくはつさんから、「もう上げんばい」と言つたら、正男君と鼻君が笑つた。正男君の笑ふ時には、小ばなのもとに、ふくれたものが立つ。鼻君の飯のくふやつがぬうなつたから、

上げて居た飯を取つてくつた。正男君もとつてくつた。

あたりに、人の話すこゑが聞えてくる。

向ふのみぢが、松の木を後にしてゐる。たきの水も白くて、ざあくとおおてゐる。白いぶくがたつてゐる。くろぼるの杉も見える。下のみちに、しもばしらが立つてゐる。それが日にたせられて、とけて、じるくなつてゐる。じやうり(じやうり)ふんで来たものは、こまつただらう。もみぢの中でも、一番赤くなつてゐたのは、たつが岩やのこつちのであつた。

遠足を課題とした綴方である。何ともユーモラスで、当時の上野の子どもたちの様子がよく分かる好作文である。山の神様に飯を半分も上げたのちつとも食べないから、「おかず」がないからだろうとみそ漬けをあげたのに、それでも食べない神様、それなら「もう上げんばい」と言つて、さつさと取り上げて食べてしまふ子どもたち。自然の中に育つ子どもたちの健康さがよく表れている。遠足の弁当のおかずが「いわし一びき」だったり「こんこのさい」だったり、その質素さには驚かされるが、子どもたちはくつたくなかない。こうした綴方が標準語ばかりで書かれたのでは、この面白さは出ない。

佐藤実はこの綴方を大変ほめた後で、方言については次のように言っている。

「⑤方言は、地の文には、なるだけ使はぬやうにしよう。」

ここでは、方言を全面的に使うなどは言っていない。「使つても会話に限るよやうに」と、暗に言っている。会話には方言を使つた方が、リアルで雰囲気が出ることは分かつていたからだろう。地の文でも、「ちつともくはつさんから」と高千穂方言を使つた方が、「少しもお食べにならないので」などとするより、はるかに味があつておもしろい。

ただ、佐藤実にすれば、この文集を子どもたちや保護者だけに読んでもらおうとは思つていなかったのだろう。「くおだ」に「(たべよう)」と注を付けたりにしているが、地元の人間のみを讀者として考へていたのなら、方言に注は要らないはずである。文集を全国誌に送つたり、他の綴方の指導者と交換したいという思いがあつたからだろう。方言を使わずに文章を書けるよやうになることが望ましいと考へていたことは事実だが、子どもたちの文集を、自分の実践を、上野という小さな村の中で終わらせたくない、世に問いたいという夢もあつたのである。佐藤実の指導は、作品「本をひろつたこと」の評「④翌日、本を拾つてかへしたかどうか、知りたいものです。拾つてかへしたなら、峯君の心は、うんと善くなつてゐるでせう。」のよやうに、綴方の評を通して人としての在り方を指導してゐるところにも特徴がある。

手をつんもつた

坂本 邦雄

くわつどうしやしんのあつた、あくる日の昼のことであつた。私があめがたを買つたのを、京子がつてゐたので、私が、「やれ」といふて取らうとすると、なくどつするので、取らなかつた。それでもくひたかつたが、「やれく」といふばかりであつた。

ぼくさんが京子をからつて、手をつつばつて立たした。手を後にかけて、広いえんに出らした時、僕は、「やれ」

といつて、からつてゐたおびを引いた。

「あいた」

ぼくさんは、おなきにたふれた。手が「きちつ」といつた時、をれたのであらう。京子は

「あんく」となくばかりである。ぼくさんは、手を後にかけてをらしたから、つんもれたのであらう。

おとつちやんが来て、私をなぐりはじめた。それで、しくくなきながら、金ひばしや、たきものや、たんもん紙やで、たぐくけれども、みんなとりあげてしまふので、こまつた。じいさんが、音がするので、もどつて見らしたら、おとつちやんが私をおこつてゐるのであつた。

「どしてそげ、おごるとか」

「ぼくさんの手をつんもつたばい」

「それでも、そげおごるな」

といはれた。

もうおごらつさんごつなつた。となりの人や、上の人や、ふさのさんが来て、もんでやられた。ふさのさんが、

「くんちやんな、いかんの」

といはれた。

手ををられた所は、かたであつた。みがとび出て、ほねの間が見えてゐた。すぐおいしや様に言つて、はうたいできびつて、ざしきにねせておかした。

おづいから、上に三ちやんがをつたから、行きよつたら、おとつちやんが、

「じゆんさんに言つて来る」

といつたので、しんばいして上に行つた。あそんでゐても、おそろしくて、よく遊べない。さうしてゐる中に、でんたうがついた。いのだつするけれども、いねばおごられる。三ちやん方にゐればくろなるし、どうすることも出来ない。かんがへてゐたら、どうしてもいにくくなつて来た。半分ぐらし来たらあとげりして、とうくいんで、ゆるりのはたにすはつて、かんがへた。「せねばよかつた」と思った。「僕の心はわるい」とかんがへた。

今でもじつとかんがへてゐると、その時のことが、心にうかんで来る。

評

① しんばいした心持が、大へんよくあらはれてゐます。

② 「遊んでゐても、おそろしくてよく遊べない」の所から、「『僕の心はわるい』とかんがへた」といふ所までが、なかくよく書けてゐます。

③ 後で、ゐろりの側に坐つて、「自分が悪かつた」と考へたことを書いてゐるのは、大へんよいことです。二度と、こんなあやまちをしないやうになるからです。

④ 方言が多いやうです。なるだけ方言を使はないやうにしませう。この文に方言がなかつたら、それこそ大した文です。

悔やんだり反省したことを書くことによつて、自分のしたことを意識化し、「二度と、こんなあやまちをしないやうになる」との考え方である。

そのためには、綴方はフィクションであつてはならない。

うつし紙

佐藤 登

着物を上げたら、お金が一銭おちました。僕はもつてはゐなかつた。だれにも見つからないやうにして、おとしに入れた。それを見つからないやうに、ゴムでまいて、戸のみぞにおいた。

いつの間にか僕の弟がぢいさんにもつていつてやつたのだらう。ぢいさんが僕におらんでやりました。その時、ぢいさんは、拾つたとは思はなかつたのだらう。僕は、「ぢいさんから見つけられると、しかられるから」と思つて、早く取りに行きました。もう時、びち／＼してゐりました。それをもらつて、ひき出しに入れました。

そのあくる日に、うつし紙を買ひました。そのうつし紙を見せるとしかられるからと思つて、おとしに入れました。

ふるをわかす時、うつし紙をあげて、どれがよいかと思つて見てゐました。まりをなげてゐるのもあれば、まりを拾つてゐるのもあります。おにのやうな者が、かぶとをかぶつたのもあります。おにのやうな者は、馬に乗つた、かひをしてゐました。土の上になてゐるのもあります。うらしま太郎がかめに乗つて、りゆうぐうに行つてゐるのもあります。色は赤・きな・土色・あを、そんな色がありました。

色々見てゐましたら、おとうさんが来ました。その時、うつし紙を早く入れた。うちへかへつて、ひろげて見てゐますと、ねえさんが来て、

「かうたんかい」

と言ひました。僕は

「うん。かうたん」

と言ひました。ねえさんは、拾つたお金とは、しらなかつたのだらう。お金のことは話さなかつた。

評

- ① 「うちの人達に、知らねばよいが」といふ心配が、出てゐます。
- ② お金を拾ふ時の気持や、ぢいさんからもらふ時の気持や、ふるばにおとうさんの来られた時の気持や、ねえさんからたづねられた時の気持を、くはしく書いたら、もつとく心配した心があらはれるでせう。「心配」といふ、先生からきめられた題でしたから。
- ③ ふろの所でみた色々な絵のやうすを、くはしく書いてゐるのは、よいことです。
- ④ 拾つたお金のことを、かくさずに、文に書いてゐるのは、えらいです。
- ⑤ 「自分がわるかつた。もう今からしない」と思ふやうに、ならなければなりません。そんなに思つたのなら、そこまで書かなければなりません。(思はないことを思つたやうに書くのは、うそですから、まだいけないことです。)
- ⑥ とにかく、正直に書いてゐる所が、この文のよい所です。

綴方によって自分のした事を見つめさせ、考えさせる。そのためにも自分のしたことを詳しく正直に書く必要がある。佐藤実の綴方指導は、表現指導と倫理指導とが一体化していると言える。

表現指導にしても、単なる技巧的なものではない。なぜそれがそうでなければならぬのか、懇々と言い聞かせている。

例えばクラスの子の父親が亡くなった時書いた「おくやみの文」四篇が載せられているが、どれも心のこもつたものだと言つた後で、次のように言っている。

「おくやみの文は、なるだけ簡単に書くのがよい。向ふの人は、どんなに悲しんでゐるかを考へて見たまへ。何どころではない。体をいためるほど、悲しむのだ。それで、よけいなことを書いてはならない。おもしろいことや、たのしいことや、うれしいことなどは、けつして書いてはならない。向ふの人の心をなぐさめてやり、向ふの人の心と同じ心になつて、悲しんでやらねばならないのだから。」

三年生の子どもにも分かるように、なぜ「おくやみの文は、なるだけ簡単に書くのがよい」のか、噛んで含めるように説明している。お悔やみ文の書き方を通して、「おくやみ文」の意味、心の在り方を指導しているのだ。

方言と共に目に付くのが、漢字の奨励である。

「漢字を、知つてゐる字だけは書くやうにしたいね。」

「かんじを、よくつかつてゐる。」

「方言とかん字に、しぜんと、気をつけたがよい。」

しかし漢字の指導にしても、漢字を使わない綴方は読みにくいのだと、その理由をはつきり述べている。

「知つてゐるだけは、かん字を使つてくれ。さうすると、文がすらく読めるやうになる。」

佐藤実の表現指導には、必ず理由が明確に述べられている。また必ずその綴方の良い所を指摘している。しかし良くない所も単刀直入に指摘する。

べんたう

戸高 崑

「しげとし君、べんたうは、どこでたぶるかい」

「かやの所でたぶだ」

「うん」

行つて見ますと、すみよし君と、みくに君がいました。そこにすはつてべんたうをたべました。

すみよし君「たけんかはに、つゝんでこんきじやい」

みくに君「うちには、たけんかはがねき、つゝでこんわい」

僕「おまひたちは、べんたうを、いくつ持つて来たかい」

みくに君「にぎりめし二つに、だんご一つ」

僕「すみよし君な」

すみよし君「にぎりめし二つ、おまひは」

僕「おんどんも二つ、しげとし君ないくつかい」

しげとし君「やつば二つ」

すみよし君「みくに君な、もう一つくたわい」

僕「おりも、もう一つくてもたぞ」

しげとし君「みんなはえね」

僕「おんどんな、もう二つめの、はんぶんをくてもるちやが」

ながもり君が来て、さうだうをしてゐた。

ながもり君「もうべんたうをくてもたぞ」

しげとし君「おどんな、こゝにねて、しを書くぞ」

僕「一ばんさきに、べんたうのしを書くぞ」

そのつぎには、もみぢをかいた。

べんたう

にぎりめしを

二つもつて来た

さいはさかなで

べちく〜につゝんできた

もみぢ

たつが岩屋のが

一ばんうつくしかつた

赤いもみぢもあれば

きんないのもある

これは「たつが岩屋」に遠足に行った時の綴方である。「にぎりめし」の弁当を食べてしまうと、さっそく詩を書いている。遠足に行つて自ら詩を書くような子どもたちが他にいるだろうか。当時の生徒である江藤博方氏は詩を書くのがとても楽しかったと言つておられるが、それを裏づけるような綴方である。

「評」で、佐藤実はこの綴方のオリジナルな点を指摘し、褒めている。

- ① たのしくべん当をたべたことが、よくわかる。
- ② 人の話す言葉だけで書いてゐるのが、おもしろい。
- ③ 詩を入れてゐるのも、おもしろい。文と詩が、きもちよくつゞけられてゐる。

その上で、次のように言っている。

④ せつかく入れた詩が、あまり、よい詩とは言へない。もう少し詩を研究して、うたつてくれるとよかつた。「べんたう」の詩は、飯とおかずと別々に包んで来た所に、何となくうれしい気持があらはれてゐて、よい詩といつてよい。「もみぢ」の詩が大へん悪い。こんな詩が、一番いけない。「一ばんうつくしかつた」といふ言葉で、美しいもみぢのやうすが、わかるかね。「赤いもみぢもあればきんないもみぢもある」は、どこのもみぢも同じだらう。たつが岩屋のもみぢをうたつたのなら、その岩屋のもみぢを見た気持があらはれ

なければならぬ。おもしろい文だが、この詩がをしい。

「べんたう」の詩では、「飯とおかずと別々に包んで来た所」に遠足の嬉しい気持ち表れていると、どこがよいのか、子どもに分かりやすく具体的に説明している。

「もみぢ」の詩でも、同じように、どこが良くないか、具体的に述べられている。「たつが岩屋のもみぢ」を対象にしているのに、他の所のもみじとどこが違うのか、どこにもその特徴が書かれていないというのである。常々「くわしく書くように」、つまり「こまかく物を見るように」と指導しているのに、表面的な見方しかしていない点を率直に指摘しているのである。

「稲かり」という綴方でも、「どんくかつてみると、太ようが、西の山におちかかつた。」という表現をとらえて、「『太陽が、西の山に落ちかゝつた』といやうなことは、いつも人が使ふことばで、古い。かへつて、使はない方がよい。」と述べている。オリジナルな表現をせよ、つまり自分独自の見方をせよと尋常三年生に言っているのである。

「米じの」という綴方では、更に次のように言う。

「自分が働いた事を、そのまゝ書くだけでなく、その中に色々と思つたり、考へたりした事を書く事が大切です。した仕事のじゆんじよだけなら、誰のする仕事でも、同じことですから、読む人の心を引くことは出来ません。考へたり思つたりした事を書くためには、働く時に、よく考へて働くことです。そこが牛馬の働きとちがふ所です。」

ここでも、「働いた順序通り表現しただけでは誰が書いたのでも一緒だから、読む人を引きつけることはできない」と、表現の独自性を強調している。読む人を引きつけるためには、その時に考へたり思つた事を書かなければならない。そのためには、仕事をする時に、よく考え、よく物を見て働く事が大事だというのである。

これは一見「表現のための生活指導」のように見える。しかし佐藤実は「そこが人間と牛馬の違うところなのだ」と、表現を通して「物を考へて行動するのが人間としての在り方だ」と教えているのである。

昭和七年の『宮崎県教育』に、草川小学校の加藤亮一が「綴方教育の正視（二）」という一文を書いている。加藤亮一は草川小学校で平田宗俊と共に綴方の指導に当たり、学校文集『草川文苑』を出していた人物である。この中で加藤は、綴方の変遷を概観し、「実に生活の表現であつてこそ綴方教育が今日の地位を獲得し、人間的教養の期待を担つてゐることが出来るのである。」と、まず生活表現重視の方向性を確認し、「これ程、生活的でなければならぬ綴方が生活の意味の強調されたあまり、生活第一か、表現第二か。表現第一か、生活第二かの問題をさへ齎らす様になり、綴方指導の二大方面として生活指導、表現指導の考察が深く究められるやうになつた。」と指摘している。いわゆる「表現のための生活指導」か「生活のための表現指導か」の問題である。

そして、次のように結論づけている。

「けれども、綴方でいふ生活指導はそのことそれ自身が表現指導であり、表現指導の実際そのものが生活の指導そのものでなかつたならば、

綴方のこの二方面は区々に分離され、やがて亡びゆく道程を辿らなければなるまい。」

もつともな結論である。宮崎でも、昭和七年にはこのような見解が示されていたのである。佐藤実がこれを読んだかどうかは分からないが、彼の綴方指導も、表現指導と生活指導の両面を「評」という明確な形で緊密に結び付けたものであった。

* 「すきな題でつづった文」

「きめられた題の文」に比べて、「すきな題でつづった文」は難しかったようである。

- 自分のすきな題のつづり方には、あまりよいがありませんでした。今から気をつけてみて、よい題があつたら、それをよくしらべて、よく考へておいて、綴方帳につけておいて下さい。
- 自分一人で、じいつと考へてみて、それをつづり方にかくのです。こんな「心のつづり方」が、大へん少いやうです。
- よく見て、よくしらべることが、大へん上手になりました。今度は「文の心」をはつきりきめて、しらべませう。
- 「もくろく」を作つて、よくしらべて書くので、文のきれめも、大へんよく出来てゐると思ひます。

これを見ると、綴方帳があり、取材帳の役目も果たしていたようである。「もくろく」はこれだけではよく分からないが、観察の対象と段取りを書いたものだろうか。

調べる綴方もやっている。三学期の文集『芽』は、植物の芽の様子を調べた綴方、「芽のしらべ」から始まっている。「春を待つ芽」である。九人の「しらべ」が載っているが、「みんなのしらべ方は、まだくたらない。もつと気をつけて、たくさん芽をこまかくしらべなければならぬ。そして、その芽の『かんじ』をあらはすやうにしなければならぬ。」と評している。調べた事、観察した事をそのまま羅列するのではなく、あくまで文芸性というか、味のある表現にすることを求めている。

では、佐藤実が最も評価している綴方はどのようなものだろうか。「火事 きめられた題」の中から、一篇抜き出してみる。

火事

一 春野の火事

僕が一年の時であつた。べんじよへ行つて来ると、くにを君が、

「半しようが鳴つてゐる」

と言つたので、先生に、

「先生火事」

と言つたら、先生が、

「しんばいするな」

と言はれた。

其の時、高等科が、ぐわたくわたと音を立てながら、らうかをはしつて来て、

「ばけつをかせ」

と言つたので、先生が

「何にするのか」

と聞かれたら、

「火事があるから、かせいに行きます」

と言つたので、先生は、

「それならかす」

と言はれた。それから、火事と知つたので、皆は「僕が先だ、僕が先だ」と言つて出た。中かうしやの庭まで来たが、見えないので、皆、北かうしやの向ふの草場まで来て見ると、見えるく、りゆうせん寺の方がもえてゐる。皆、口々に、

「うちがやけはしないか」

「りゆうせん寺のお宮がやけはしないか」

などと言つて、泣きかぶつてゐた。

おそろしくなつたので、僕は、せきへ帰つて来ると、のぼる君が泣いてゐたので、そばにゐた邦雄君に、

「なぜ泣きよるとかい」

と聞いたら、

「うちがやくると言つて、泣きよる」

と答へた。僕は、「のぼる君のうちの近くだが、心をいためてはいけない。又ますく泣くと、かはいさうだ。又めいわくだ」と思つて、

「泣くな、君のうちじやない」

と言つてなぐさめた。

又出て見てゐると、だれかが、

「春野だ」

と言つたので、皆其の方を見た。ほんたうと思つたのだらう。春野の者たちは、先生に言つて帰つて行つた。

其れから間もなく、三田井からガソリンポンプが二だいぐらゐ来て、一しやうけんめいについたので、一時間ぐらゐすると、大火事もとう／＼きえた。

其の明くる日、先生が、

「昨日あつた火事は、子どもが寒いからと言つて、わらに火をつけて、それからおこつたのだ」と言はれた。

其の時の火事に、今僕の前の机にゐる、今朝義君のうちもやけたのだつた。

二 火事はなぜおこるか

(1) 家の火事は、なぜおこるのであらう。

子どもにマツチを持たせておいて、それを子どもが、春野のあつた火事のやうに、寒いからと言つて、わらにたきつけて、それからおこることもある。

又、ふるやかまどに火をたいて、それを其のまゝにしてねる。其れからおこつて、春野のやうな大火事になることもあれば、たばこのすひがらを、其のまゝにしておいて、其れからおこることもあれば、こたつには入つてゐて、上にかけてあるふとんを、ふみくべて、其れからおこることもある。それから、まやや、ふるばに、ちやうちんをつけておいて、風がちやうちんを吹きとばして、その吹きとばされたちやうちんのわきに、たきものがあつて、それに火がついて、それから、大火事になることもある。

又神様においたおあかりを、ねずみたちがとびまはつて、おあかりをたふして、其れからおこる火事もある。小さいせんこうを、「なあに、小さいから」とゆだんをして、それからおこる火事もある。

ねる時、火を其のまゝにしておいてねる。それが、ゆかの下には入つて、それからおこることもある。よそへ行く時、火を其のまゝにして行く。さうすると、小さい火が、だん／＼と大きい火になつて、火事になることもある。

(2) 家の火事は、さう言ふふうにしてなるが、山火事は、どうしてだらう。

よく、すみやきさんたちが、火をたく。それをわすれておいて帰る。其れからおこる山火事もある。すみやきさんたちが山でこはんをたべる時、おちやをわかす。その火をそのまゝにしておいておこることもある。

三 どうすれば、火事はおこらないか。

今まで書いたことに注意すれば、火事はおこらない。その中でも、子どもたちに、マツチを持たせぬことである。子どもにマツチを持たせなかつたら、あの春野の大火事は、おこらなかつたのである。又、火の用心をまもることである。

四 大せつなせうばう組

せうばう組は、大切なものである。なぜかと言へば、火事の時、けす人は、せうばう組だからである。

それでも、ポンプがなければ、火をけすことは出来ない。それで、せうぼう組と、ポンプは、大せつなものである。

五 しを田さんのをしへ

この前、三時間がはつて、帰る時、ひろうんどう場で、しほ田さんのお話を聞いた。聞いて見ると、日本は、世界で二番目に火事のあ
る国ださうだ。

三年生とは思えない筆力である。一年生の時の火事の様子から書き起こし、それを踏まえて「火事はなぜおこるか」「どうすれば、火事はおこらないか」と原因と対策を考え、「大せつなせうぼう組」で、火事が起きた時に機能するものは何か、その消防団組織の重要性を述べている。そして最後に、日本は世界でも極めて火事が多い国であるから、それだけ火事には注意が必要であることを、「しを田さんのをしへ」を引いて強調して終わっている。構成のしっかりした論理的な文章である。この作品に対して、佐藤実は次のように評価している。

- 評 ① 見た火事をくはしく書いただけでなく、「火事は、どうして起るか」「それならば、どうすれば火事は起らないか」まで、深く考へて、くはしく書いた所が、大そうよい。
- ② 書く前に、よくかんがへて、もくじを作つて、それについて、くはしくかんがへたからだ。
- ③ 一年の時の火事を、これだけくはしく書ければよい。
- ④ 「火事はなぜおこるか」も、大そうよくしらべてゐる。
- ⑤ かんじも、よく使つてゐて、ぬけ目のない文だ。

まず「見た火事をくはしく」文芸味のある文章で書き、その後、調べた事、考えた事を論理的に展開しているところを評価しているのである。絶讃と言つて良い。

「もくじを作つて」というのは、構成指導に「もくじ」という語を使用していたのだろう。調べた事を羅列するのではなく、目次を作つて論理的に展開する指導である。

なお、他の子どもの綴方「火事」には、「てうせん人が火をつけた」という噂が流れたことが書かれている。

春野の火事の時、僕の級の者は、
「てうせん人が火をつけた」

といひ合ひました。それでも僕は、女の子もか、男の子もか、つけたんだと思つてゐました。其の時、今朝義君が来て、「女の子がつけた」といひました。

昭和九年末という時代を思わせる出来事だが、これに対する佐藤実のコメントはない。

文集『芽』の最後は、「年の晩 お正月 を のぞく」の中の、江藤博方の二篇の綴方で終わっている。それ以降（六十三頁以降）が欠けているためである。

年の晩（新） 十二月三十一日

江藤 博方

年取の晩だ。僕は十一だ。かうして一年々と年をとつて行くと思ふと、うれしくなる。又、今日は、雨の降る上に風が吹く。その雨風は、がたくと、戸や、ガラス戸や、本の上に降りかゝる。何とも言えない晩に、僕たちは一つ年を取つて十一になり、又、一だんづゝえらくなつて行くのだ。又一つづゝ年よりになつて行くのだ。かうして、僕たちも、死ぬ時が来るのであらう。其の死ぬ時まで、僕たちは、人をよろこばせてやりたいと思ふと、じつとしてはゐられない。もし、長く生きてゐたなら、それだけ人々をよろこばせてやりたい。もし僕が、父母よりも早く死んだら、父母には親ふかうとなり、近所の人たちには、どんなにめいわくをかけるだらう。

去年の八月十五日、弟の允雄が死んだ時に、お母さんは、泣きながら、

「父母より先に死ぬ者は、親ふかうだ」

と言はれたことを思ひうかべると、たまらなくなつてくる。一つ年を取つたら、取つただけ、えらくなり、体をじやうぶにしなければならぬ。

評 ① 深くものを考へて見ることは、綴方でなくても、大そう大切なことだ。年を一つ取る時には、それだけ、ものを深く考へるやうにならなければならない。さうすることが、ずん／＼とえらくなることになる。

② 年の晩に、作者が、これだけ、深く、自分についてかんがへたことは、どんなにほめても、ほめたりない。

③ 又、しんけんにかへたことがら、大へんよいことだ。「長生をして、父母に孝行し、近所の人にめいわくをかけず、なるだけ多くの人を喜ばせる」といふのだから。

④ 弟の死んだ時のことを書いてゐる所を読むと、本当に、泣けてくる。

⑤ ことはもはつきりして、なか／＼よくわかる。

年齢が十一というのは教えだからだろうが、子どもなりに真剣に生と死について考えている。弟の死を踏まえて、父母に歎きを与えないように、年々成長していきたいという前向きな姿勢である。

ところが、明けて二月の旧「年の晩」になると、様子が変わってくる。

年の晩 (旧) 二月四日

江藤 博方

年の晩だ。はんだいから立ちのいた僕は、こたつへは入つて考へて見た。

皆、年の晩と言ふとうれしいさうだ。僕もこの前までは、年の晩と言へばうれしいものだと思つてゐたが、今になつて、よく考へてみると、年の晩はかなしいものだ。なぜかと言へば、(筆者注 二字不明) 年の晩に、皆一つづゝ年よりになつて行くのだ。何時か本にかう書いてあつた。

或る所のおしやうさんは、皆が年の晩だと言つてゐると、はか場から首から上のこつを掘り出して、つえの先につけて、町を通り、「年の晩と言ふものは、何もめでたい事はない。皆も、何時かはこのこつのやうになるのだ」と言つて、町中を歩きまはつたさうだ。

これに対して佐藤実は、「考え過ぎだ」などとは言わない。まず、深く考えている事を褒めている。本を読んで考えた事も、それを綴方に書いた事も褒めている。年を取る事の悲しみも、深く考えた者だけに分かる事だと理解を示している。その上で自分の意見を述べている。

評 ① 前も言つた通り、作者には、なか／＼深く考へる、よいくせがついてゐる。このことが、綴方では大そう大切だ。

② 本に書いてあつたのを出して、自分の考へを、よく分からせたのもえらい。

③ 「年取りのことを考へると、悲しい」といふことは、深く考へた者だけに分かることだが、なほよく考へてみると、これは正しくない。なぜかといふと、この考へ方でいけば、人々は、毎日々々悲しいことになる。さうすれば、人には、おもしろいことも、たのしいことも、ないことになる。だから、「年を取ることはいふやうに考へるやうにしなければならぬ」。

尋常三年生に対して、ごまかすことなく、まっすぐに答えていると言つて良いだろう。佐藤実は、表現指導を重視しながらも、それは個人独自の物の見方考へ方を助長する方向での表現指導であり、人としての在り方を示し、思考を深めることと深く結びついていた。「火事」における「てうせん人が火をつけた」という噂に対して、少なくとも綴方の評では何のコメントもしていないように、社会的な問題に目を向けさせる方向での指導はしていない。中学年が対象だったということもあるが、佐藤実自身の綴方に対する姿勢だったのだと思われる。

(詩の指導)

詩の指導もやはり「評」という形を取っている。それと詩話である。いずれも当時一般になされていた形である。指導作品は、全体に、情景や、ある状況を客観的に描写したものが多い。

あしや(てつびん)

奇藤 芳仁

あしやがたぎつてゐる

しゆんく

ふたをふきとばさうとたぎつてゐる

見たままを書いた詩である。この詩の評で、佐藤実は、

○ 湯の力の強い所をうたつたので、「ふたをとばさうと」がそれである。

○ 「しゆんく」といふ音は、まだよく聞いて見なければならぬ。

と述べている。言い古された表現への注意である。

いもうと

阿南 正範

おとうさんが

ゆるりのはたで

さかなを きつてゐる

いもうとが

そばによつて見てゐる

○ いもうとのやうすが知りたいものだ。

妹だけでなく、お父さんが何のために魚を切っているのかも知りたい。妹が側によつて見ている様子から、何かのお祝いか、特別な行事のための料理に思える。

しも

江藤 武雄

にはのしもの上を

だれか早くとほつたのだらう

ごむぞこのかたが

大きくついてゐる

○大きなごむぞこのかたで、人が急いで通つたのを思ひだしたのがよい。

この詩は、霜の上に残された大きな靴跡で動きが感じられ、ある種のおもしろさがある。

きり

佐藤 利久

きりが山に白くかゝつてゐる

中から

鳥が一羽とんで出て来てゐる

○やうすが、夢のやうに思ひ出される。よい詩だ。「出てきた」としないで、「出て来てゐる」としたのはえらい。

佐藤実はこの詩を高く評価して、「詩話」にも引用している。

詩話(1) 今、見えてゐるやうに書くこと

先生

きり

佐藤 利久

きりが山に白くかゝつてゐる

中から

鳥が一羽とんで出て来てゐる

こんな詩は、読む人に、今見えてゐるやうに思はせることが大切です。「鳥が一羽とんで出て来てみた」とか、「鳥が一羽とんで出た」であつたら、これ程よく、景色を思ひ浮かべることが、出来ないでせう。「みた」といふ言葉は、前にあつたことをあらはす言葉で、「みる」といふ言葉は、今をあらはす言葉です。詩は、今をあらはす言葉で書かないと、よくその様子を思ひ浮かべることが出来ません。

朝

古西 一市

朝おきて見ると

うすぐらい

にはとりが

ぐうつと

こゑをからしてないてゐた。

作者は、この詩をすゐかうして、

朝

朝おきて見ると

うすぐらい

にはとりが

ぐうつと

こゑをからしてないてゐる。

としました。これで朝早くの気持が、よく出ました。

「朝」についてはその通りだが、「きり」はどうだろう。「中から／鳥が一羽とんで出た」という表現でも、形は過去形だが、霧の中から飛んで出た瞬間をイメージできるのではないか。「鳥が一羽とんで出て来ている」というのは、表現そのものが不自然である。「詩話」では、言語表現の具体的な指導が多い。

詩話(2) その気持にびつたり合つた言葉

先生

すゞめ

甲斐 昇

すゞめが

かしの木に一ぱいとまつてゐる

おうたら

どろくくとにげた

この詩では、「どろくくと」といふことばは、気持にびつたりと合つたことばです。「どつとにげた」であつたら、すゞめが一度に逃げた時のことばで、「どろくくと逃げた」とは、別な気持がします。すゞめが、かしの木から、「二三羽づゝ羽根の音をさせながら逃げたのですから、「どろくく」でなくては、その気持が生まれません。「ぱつと」でも、「ばたく」でも、やはりいけないでせう。「どろく」といふことばが、気持にびつたりと合つたことばです。

「あしや(てつびん)」（奇藤芳仁）という詩で、「『しゆんく』といふ音は、まだよく聞いて見なければならぬ。」と、その言い古された表現を注意した佐藤実は、ここでオリジナルな表現とはどういうものか、具体的に説明している。

その「あしや」で注意された奇藤芳仁も、この「詩話(2)」では、「新しい戸」という詩の表現ではめられている。

新しい戸

奇藤 芳仁

すうつと風がふいてきたら

新しい戸が

ぱあつとあかつた

「すうつ」と吹いて来た風ですから、戸が「ぱあつ」とあかつたのです。「ぱつとあかつた」であるとすれば、この詩はうそになるのです。「ぱあつ」としなれば、よく気持があらはれないのは、そこです。

これはその通りである。これ以上付け加えることはない。言語表現の真実性とは何か、具体的に分かりやすく説明している。こうした写実性の詩は今日から見ると物足りない面もあるが、中には次のような詩も生まれてくる。

にうえいへいのこくき

佐藤 利久

町の下の方に

こくきが一本たつてゐる

そのわきに

とたんぶきや かやぶきの家が

なんげんもたつてゐる

佐藤実

「へいたいといった人のうちに立つてゐる国きを、上からながめたので、屋根のことを書いてゐるために、大へんよい詩になつてゐます。うんどう場から見下したのささうです。」と評している。

どういう意味で大変良い詩になつてゐるのか、この評だけからは分からないが、入営という名誉の象徴である国旗が、家々を庄して輝いている様子が良く出ているというのだろうか。

見ようによつては、一本だった国旗が次第に二本となり三本となり、他の屋根へと移つていく無気味さを感じさせもする。むしろそれは、戦争のその後の展開を知っている今日から見ての話ではあるが。

しかしいずれにしろこの詩は、そういう多様な思いを抱かせる情景を描ききつてゐる。言い換えれば、そういう情景によく目が行つた、よく見たということである。そこが「良い詩」だと佐藤実は言うのだろうか。

ちりすてばのかみ

江藤 義雄

ちりすてばに風がふいたら

かみが

はんたいになつた

評 ちよつとしたことでも、よく見ると、こんなよい詩になります。

風

阿南 正範

風がふいてきた
かみと たけのかはが
ひつくりかやり ひつくりかやり
ちの上をもうていく

評 見えるやうでせう。どんな風か、分かるでせう。

を(麻)

古西 一市

風がふくと
をがおれるやうになります
しろいところが見えます

評 あさの畠に風がふいて、あさの葉が白くみえるのを、うたつたのです。大へんよい詩です。

これらの詩を「よい詩」と評価しているのは、見た物を見たように、読む側に「見えるやうに」描くのが詩だと考えていたからだろう。しかし次のような詩もある。

あめかぜ

馬原 重利

ぼくが
かまの下をたいてゐたら
あめかぜがふいてきた

上を見たら
ぼくのかほにかゝった

評 雨風のきもちがよくでています。

かまの下をたいてゐる時だったからで、こゝが大切なところですよ。

「雨風のきもち」とは、雨風が吹いてきたときの「ぼく」の気持ちの意味だろうか。上を見上げて顔に雨粒が落ちてきた時の「はっ」とした気持ちだろう。そうした瞬間の気持ちの動きが感じられるのも、かまどの火と雨が対照的だからなのだ。これは「見たまま」ではない。が、「体験したまま」を描くという意味では同じである。かまどの火を焚くという、「労働」そのものを描いたことを評価しているわけではない。

たうきびもぎ

菅 一光

たうきびをたゝいてゐる

こちくとたゝくと

もげたのがとぶ

とび出るので戸をしめた

しんころが山のやうになつた

どうもろこしの実を「こちこち」と叩いて、はがしているのである。「取れた実が外へ飛び出すので戸を閉めた。実をはずした芯が、いつのまにか山のようになつた。」という意味である。

この詩の評は、「働きの詩だ。」という一行だけである。

おとうさん

馬原 重利

おとうさんが

ばしやひきからかへつてこられた

のこくづのあせが
ながれてゐる

昭和十年版『年刊 日本児童詩集』に掲載された詩である。この詩に対する評も、「よく働くおとうさんだね。」とあるだけである。働く父親の姿に目を向けたことに対しては、何も言っていない。

どんぐり林

戸高 崑

きりがかゝつてゐて

どんぐり林の下の方は見えない

その中に

とうびいが見える

「とうびい」とは鳩(カイツブリ)のことらしいが、これに対する評は「気持よい景色の詩だね。」である。

佐藤実の評は「働きの詩」に対してはそっけない。綴方には「働きのつどり方」というまとまったコーナーがあるのだから、労働を軽視していたわけではない。しかし詩の対象として労働を意識していたとは思えない。

文集には、「よその子どもの詩」が参考例として幾つも載せてあるが、それは次のようなものである。

雨

なゝめに

つよくふつてゐる雨

ガラス戸にはねる

みんなしづかに字をかいてゐる

(東京)

はた

のきのはたが
風にあかれて
ぴらく音をたててゐるよ
とんぼが上をとんでゐるよ

(岡山)

参考例は、ほとんどこうした類の詩である。

とんぼ

風がひゆうくふくたびに

とんぼが

おちさうになる

(岡山)

菅 邦男

○よくよんで、思ひうかべてごらん。

事象を捉えて、それがまざまざと蘇るように、新しい言い回しで描くことが、佐藤実の目指す児童詩だったのである。したがって、次のような詩は、あまり肯定すべきものではなかったようである。

葉書

江藤 博方

春一君から
葉書が来てゐる
よんで見ると
しまへの方に

「四六四九」と書いてある

この詩に対して佐藤実とは、『四六四九』と、かんじで書いてあるのが、おもしろいといふ詩だ。『よろしく』とよめるだらう。おもしろい詩だね。」と肯定しながらも、「(よめても、わけが立たないから、君達は、つかはぬがよい)」と付け加えずにはいられない。

綴方の中でも、「はととはと」(土持博明)という童話に対して、「童話をつくる場合は、その前に、本当のことからについて、くはしくしらべておかねばならない。机の上で、おもしろく考へ出した話は、作りばなしで、うその話である。よく調べて、よく考へる」と言っている。

江藤博方の「はしらととけい」というコント風の文章に対しても、「考へつきが、なか／＼おもしろい。」と評しながらも、「いつも、こんなおもしろい思ひつきの童話ばかり書くことはいけないから、時々こんなのを作ることにしやう。のび／＼とした、新しい童話を書けないやうになるからだ。」と注意をうながしている。

「うその話」や「思ひつきの童話」も、子どもが本来持っている想像力、敢えて言うならのびのびとした空想力を羽ばたかせるファンタジーとして認識することも可能だが、佐藤実はその「事実には縁のない、真実感のない空想」(菊池知勇)に流れることを危惧したのである。

佐藤実の上野小学校での実践は、この年で終わるが、綴方や詩を書く事は子どもたちにとつて、ずいぶん楽しかったようである。前述したように、「たつが岩屋」に遠足に行った時には、弁当を食べてしまうと、子どもたちはさっそく詩を書いている。詩を書くことが、子どもたちには日常的なことだったのである。詩が子どもの生活に入り込み、自然に詩作していたのである。

佐藤実とは、文集の中で「誤字、読点、句点」以外は子どもの作品にいっさい手を入れていないと断っている。江藤博方氏によると、口頭でも「使い古された表現は使わない」といったことをしよつちゆう言っていたようだが、自ら手を入れて修正するようなことは、いっさいしていない。「評」による指導である。それも、子どもたちが自主的に楽しく詩を書けた一つの要因だったと思われる。江藤博方氏は子どもの頃、詩や綴方を書くのが楽しみで、文集に作品が載ると、とても励みになったそうである。

江藤氏等が還暦を迎えた時、当時の同級生十人ほどで、佐藤実の墓にお参りしたとのことである。

3、押方尋常高等小学校での指導

① 佐藤実の綴方指導法

昭和十年に、佐藤実と同じ西臼杵郡にある押方尋常高等小学校(高千穂町)へ転勤になっている。二年生の担任である。二年生はクラスのみで、男女六十五名の大所帯である。当時の生徒である飯干竹清氏によると、佐藤実は「作文や詩の好きな先生」で、休み時間には

子どもたちとよく遊んでくれたそうである。綴方指導もすぐに始めている。

しかし当初は綴方指導にも戸惑いがあったようである。『宮崎県教育』（昭和十年七月号）には佐藤実の「綴方観察指導の実践記録」が掲載されているが、その冒頭で次のように言っている。

「上野校より転校した私は、今迄に経験したことのない尋二と言ふ低学年、而も男女合せて六十五名の学級を担当せねばならなかった。上野校に於ける四年間の教師趣味本位の私の綴方指導生活も、こゝに到つて全く趣味でなくして義務となつたと言つてもいゝ位である。先づ、綴方とは如何なるものかを知らない尋二の綴方を、如何に指導すべきかが、全然分らない。だからと言つて指導しない訳にはいかない。私の私的なやみは、先輩諸氏によつて解けると思ふ。故に、私の綴方指導の実践記録の一端を、この誌上に発表して、御批評をいたゞかうと思ふのである。」

低学年で男女六十五名という大人数の学級では、優雅な綴方指導とはいかなかつたようである。「綴方とは如何なるものかを知らない尋二」とあるから、それまで押方小学校では、佐藤実が考えるような綴方の指導はなされていなかったのだろう。

佐藤がまず行つたのは「口頭の綴方」である。指導者と児童、あるいは児童同士の自由な話し合いの中で語られた「児童の生活」を指導者がまとめるのである。それを一つのまとまつた話として、または文章化して子どもにも提示する。あるいは話したままを板書し、児童にノートさせる。こうして「自分の生活のあるが儘な表現が綴方である」ということを、「自然に悟らせる」のである。

こうした指導を行つた後に数回創作させてみたが、「概念的言葉の羅列」であつた。その原因が「具体的表現のこつを知らない」ことにあると考へた佐藤実は、観察日記、それも「多くの綴方指導者の行つた長期間継続観察の日記でなくして、短い期間を定めて、出来るだけ能動的に、緻密に観察させやうと」した。一つの対象にかける観察期間を短くし、代わりに対象を複数にするのである。「かうした日記の方が、面白く、多面的な観察が出来て、効果的であると思つた」からである。

『宮崎県教育』に発表された実践記録は、観察日記の前に行われた「観察の方法」の指導記録である。また観察日記を記入させる段階には行つていなかったからである。

題目 虫のしらべ

目的 (略)

時間 四時間

第一時 鑑賞文取扱と、かたつむりのしらべの宿題

第二時 宿題の観察要項を基として創作

第三時 児童文の鑑賞批評

第四時 校庭に棲む虫類の観察（作品は文集上にて処理）

第一時は、「蛙」に関する観察文を使って、綴方とはどういうものかについて話している。児童数名に朗読させた後、次のように展開している。

「よく調べてみますね。くはしく書いてあるので、その様子のはつきり分つて、今日の前に見えてあるやうに思はれますね。それなら、一日の中の何時頃調べたのでせうか」

×はい、先生、昼頃です。

「さうく。何時調べたかも、はつきり書いてありますね。」
(いっのことかと板書)

「この蛙は、どんな所にゐたのですか」

×はいく。自分のうちの下です。

×田のあぜです。

×米の生えてゐる田の畦です。

「さうですね。どんな所かも、はつきり書いてありますね。」

(どんな所かと板書)

「その蛙の色は」

×土色のぶちくのある蛙です。

「さう。色もはつきり書いてありますね」

(どんな色かと板書)

等々

こうした問答をくり返しながら、「何時のことか。どんな所か。どんな色か。大きさは。頭は。目、鼻、耳、口は。からだは。足は。」と板書して行き、蛙の何が観察され、表現されているかをおさえていくのである。

「よくしらべてみますね。こんきよく、順序よく調べてあるでせう。蛙が逃げないやうに注意して、ぐつと田の畦にかぐんで根気よく調べてゐる子供の姿が、よく思ひ浮かんでくるでせう。みんなも、こんなに精しく調べることが出来ますか」

×出来ます。

×先生、易いです。

「それじゃ、調べて来てもらひませう。調べて来れる人は、手を挙げて御覧なさい。(殆どにこくして挙手)

よし。それぢや、宿題にしませう。

×うまいく。

×うれしい。(拍手も聞える)

佐藤実はこのあと「何を調べて来てでもいいですが、今度だけはかたつむりを調べて来てもらひませう。」と蝸牛を対象にし、「この蛙の文の様に順序よく、精しく調べてもらひませう。よく見て、人が見付けきらぬ様な小さい事まで調べて下さい。」と結んで第一時を終わっている。

第二時は、児童が調べて書いてきたものを数名に読ませ、調べた事を書いた紙を見て「かたつむりのことを思ひ出して」書くこと、紙に書いていないことでも「よく思ひ出して精しく書いてい」ことを言つたうえで、文を書かせている。

第三時は、児童の綴り方の中から「大そう精しく調べて」あつたものを板書し、本人に朗読させた上で、皆で検証している。

かたつむり

戸高ミヨコ

私が、上の方でんくむしをさがしにいきよつたら、さゝのはにをりましたから、そこにしやがんで、よくしらべてかきました。
かたつむりの大きさは、くりぐらゐでした。

かたちは、たひなのやうでした。

私が見たのは、白いでした。白い所にくろいすぢがありました。

あたまは、すこししろくて、つこのやうなものが四つありました。つがないとが(ノガ)二つありました。みぢかいとが二つありました。さうして、つのはうごいてゐました。

目は、つこのさきにありました。目はまんまるくて、くろくありました。

口はわからないほど小さいくありました。

私が、からだにさはつてみたら、やはやはとしてゐました。つこのさきにさはつたら、一ばんさきに、つのがかくれて、そのつぎにあたまがかくれました。

とつてみたら、ひつこんでしまひました。そして、かはがちびつと(少し)かたかつた。そして、またははせました。いつときたつてみとつたら(ミテキタラ)、またでました。

朗読の後、この文のどこが好きかを児童に問うている。

×くりぐらゐがいいです。

×白い所に筋があるがいゝです。

×さはつた所。 等々

子どもたちの答えをほめたあと、佐藤実とは、それ以外に「先生の好きな所」をあげている。

○つのが動いているのっているのは大層えらい。

○口は分らないほど小さいと書いてあるが、どんな口かまで見極めて書くともっと良い。

○取ってみたところや殻が少しかたかったことを書いているのもよく気を付けて見ている。もっと良い所は、蝸牛をまた這わせてじつと立って見たこと、また角を出したことをかいているところである。

そして「みよ子さん、それからそのかたつむりはどうしましたか」と作者に聞いている。

×そのまゝにして帰りました。

「それはよい事をしましたね。みよさんは、調べる時をかたつむりをいぢめないで調べ、調べてからも、そのまゝ逃がしたことは、生物を可愛がる心があるからです。人の役に立たない生物や、人の害になる生物でも、むやみになぶり殺しにすることは、わるい心です。みよさんが、そのまゝ逃してやつた心は、やさしい心ですね。」

文集『芽』の「評」を思い起こさせる指導である。ここでも綴り方から「心の在り方」を説いている。

最後に、「かたつむりの居た所は上の方」とあるが「上の方のどんな所かをはつきり書かないと」よく分からないことなど、「かうすればよくなる」というところを指摘してこの時間を終わっている。

次の体操の時間に、庭にいる虫を調べさせている。子どもたちが調べて来た虫は、「大半が蟻」で、あとは「いもり、おたまじやくし、蝶、蜂、飛行機虫、ぎめ」などである。それをもとに再度文章を書かせている。

佐藤実はこの実践を「児童の心理を無視した此の指導も、理想を表現さす事の出来ない私にとつては、相当計画的なものであつた。この指導が、児童生活のあらゆるものゝ表現上に、幾分でも役立つとしたならば、私はそれでいゝと思つてゐる。」と締めくくっている。

児童の心理を無視した指導と書いているのは、低学年にはレベルの高い表現指導という思いだけでなく、実際に退屈している児童がいたからだろう。「さつきから、不注意児童が数名ある」と、第三時の終わりの方に書かれている。

このように当初当惑気味だった佐藤実だが、一学期の終わりには、全国誌に載るような作品が生まれている。

② 押方小の子どもの作品

押方小学校での指導作品としては、昭和十一年版『年刊 日本児童詩集』（七月）に掲載された「ソトデ」（坂本アヤ子）という詩が一篇、同『年刊 日本児童文集』（六月）の綴方「ヤマイモホリ」（甲斐政尚）が一篇残されているのみである。

『年刊 日本児童詩集』には、「刊行の趣旨」によると、尋常一年から高等科までの計六〇〇篇の詩が掲載されているが、このうち、宮

崎の子どもの詩は四篇である。作品は学年ごとに分けられ、各学年の扉には例えば「木ノボリ 尋一作品」といったように題が付けられている。その「どろをとる舟 尋二」に「ソトデ」は掲載されている。

* 「どろをとる舟 尋二」 四月

ソ ト デ

坂本アヤ子

宮崎県西臼杵郡押方小学校

(佐藤實 先生指導)

ムカフデハ
 クサバニクサガハエテ
 ソヨ／＼シテ
 キモチガヨイ
 ココデハ
 マツクロイ サ克蘭バウガ
 オチテキマス
 シタデハ
 ミンナガ
 ウツクシイジヲ
 カイテキマス
 モングチノシタデハ
 ミンナガ
 オランデカイテキマス
 ワタクシハ
 ダマツテカイテキマス

押方小学校は高千穂町の市街地から車で十分ほど行った深い山に囲まれた学校である。山裾を削ったと思われる高台に校舎が建っている。飯干竹清氏によると、校舎の位置は少しずれたが、地形は昔のままだという。

石段を登り切った所に正門があり、その左右に校庭の地形に添って樹木が植えられている。昔は桜の木が植えられていたそうである。今でもその中の数本が残っている。

正門から左手にはいると、校庭から正面に小高い丘が見える。今は木が生えているが、昔は一面の草場で、この草を刈り取って馬の飼料にしたのだという。「ダルワラ」という所で、当時の子どもたちはそこを「向こう」と呼んでいた。昼休みになると弁当を抱えて食べに行つたものだという。詩の一行目「ムカフデハ」の「ムカフ」とは、この「ダルワラ」のことである。校庭の桜の木の下から見た「ムカフ」の草が「ソヨクシテ」気持ち良かったのである。

詩中に「マツクロイ サクランバウガ」とあるが、飯干氏によると、これは普通の桜の木の、小さな黒い実のことである。

「シタデハ」は、皆が美しい字を書いているとあるから桜の下ともとれるが、次に「モングチノシタデハ」とあるから対句的にとれば、校庭の下とも解せる。

「モングチノシタデハ」は正門の下である。正門の下で大きな声を出しながら書いている同級生、それに対して黙って書いている「わたし」と対比的に描かれている。何を書いているのかは分からないが、上野小の子どもたちが遠足の時にも詩を書いていたことを考えると、この子たちも詩を書いているのかも知れない。

押方小学校を訪ねたのは六月も終わりの雨の日だったが、一面の緑が鮮やかで美しかった。この詩はおそらく新緑の頃の情景であろう。実にさわやかである。

ヤマイモホリ

甲斐 直政

宮崎県西臼杵郡押方尋常校

ボクトアンチヤンガ、ウチノ上ノ山ニ、山イモホリニイキマシタ。ホツテミタラ、石ノ中デ、ホレマセン。山イモハ、ヒラブレシテ、ナガカツタ。「タツタコシコジヤ、ツマラン」トイツテ、マタホカノトコロニイツテ、ニツルミツケタ。アンチヤンガ、「ワリガホレ」トイツタガ、ソコハツチガフカクシテ、ホレマセン。アンチヤンガホルトハ、ヒガ、パツパツデマス。

下ニイツタラ、山イモツルガ、ニホンアリマシタ。ソレカラ、ボクガ「イヌルゾ」トイツタラ、「ドウシテヤ」トアンチヤンガイヒマシタ。「マアヒトトキヲロダ」。ボクハヨリマシタ。ソコハ土ガヤハクテ、ホリイイトイツタ。「ソコニデトルヂヤナイカ、ホリキルゾ。ボクガ、ソノツルヲヒツパツトルワイ。」

「オオ、ヒツパツトレバ、ホリイイ」

一ツホツテシマヒマシタ。

「マア一ツホツタラ、ナホ、イヌルワイ。マア一ツホルワイ。」トアンチヤンガ、イヒマシタ。ボクハ、ヨリマシタ。サウスルト、アンチ

アング、「ウソジヤガ、マダ、ミツケタシコ、ホツテカラ、イヌルトヂヤガ」トイヒマシタ。「アツコノデンキガ、ツウトルヂヤナイカ」
「ソソナラ、イヌルワイ」トアンチヤンガイヒマシタ。
インデミタラ、メシヨクウヨラシタ。

同級生の飯干竹清氏によると、甲斐直政は長男で、「アンチヤン」は実兄ではなく、叔父に当たる人だという。若い叔父さんから山芋掘りに連れて行ってもらったのだろう。夕暮れになり、早く帰りたいのに「アンチヤン」はもう一本掘ってからと言って帰ろうとしない。そのうち山里に灯が点ってくる。その心細さが描かれている。家に帰ってみたら、もう、食事の最中だったのである。

4、佐藤実・短すぎた教師生活

「ソトデ」や「ヤマイモホリ」に佐藤実がどういう「評」をつけたかは、文集が残っていないので分からない。文集そのものは、前述した実践記録に「文集で処理」という言葉が出てくるから、あったのだと思われる。「ヤマイモホリ」に「佐藤実先生指導へにた」とあるから、「にた」が文集名である。

「にた」とは湿地、沼田のことである。押方小学校は周囲を深い山に囲まれている。今こそ高千穂峽に橋がかかり、高千穂町の市街地から車で十分ほどの距離であるが、昔は深い谷に区切られていた。区域も広く、詩「ソトデ」の作者坂本アヤ子も、四キロもの山道を歩いて通っていたという。「にた」は、そうした環境に由来する命名だろうか。

しかし文集については、飯干竹清氏や他の同級生にも記憶がないという。上野小の創立百周年記念誌には、佐藤実の思い出と共に文集「芽」のことが出てくるが、押方小の記念誌には文集のことは出て来ない。上野小の『芽』のような本格的なものではなかったのだろう。経済的な援助も望めなかっただろうし、何より、佐藤実が押方小学校に出勤したのは一学期だけだったからである。

飯干竹清氏の話では、昭和十年の一学期は「佐藤実」に習ったが、二学期は病気で休職、そのため女の先生から習い、三学期はまた別の先生から習ったという。病気というのは、肺結核である。したがって文集は一冊のみである。

いずれにしても、佐藤実が四月に転勤してきて、一学期の内に坂本アヤ子や甲斐直政のような全国誌に載る詩・綴方を書かせ、二学期には結核のため休職したのである。そして、そのまま学校に戻ることはなかった。創立百周年記念誌『おしかた』の「旧職員名簿」には、「佐藤実 昭和一〇・四〜一〇・一二」とある。十二月に亡くなったのである。自殺である。岩戸神社参道近くの谷に掛かっていた吊り橋から、身を投げたのである。押方小の尋常二年生だった飯干竹清氏と同級生一人が代表で葬儀に行き、弔辞を読んだのだという。

まだ二十六歳の若さであった。

附記 詩「ソトデ」は『日本の子どもの詩 宮崎』にも再録されているが、そこでは「西臼杵郡押方校（指導）佐藤寛」となっており、指

導者名が間違っている。また「坂本アヤ子」も「尋二」ではなく「小一」となっている。これも誤りである。

(二) 鞍岡小学校の子どもの詩

↳ 山崎梅夫の指導↳

1、佐藤実との交流

山崎梅夫は、昭和六年三月に宮崎県師範学校本科第一部を卒業すると、同三十一日付で西臼杵郡鞍岡尋常高等小学校に赴任した。高千穂町三田井の出身で、佐藤実とは同郷である。師範学校の卒業も同年であり、新任校も同じ西臼杵郡の学校だった。

佐藤実の実家は当時から三田井で畳屋を営んでいたが、弟の佐藤正男氏によると、そこへ訪ねてきては綴方や児童詩について熱心に議論していたという。佐藤実が結核で休職している時にも訪ねて来て、遅くまで議論しているので、「実」の体に障らねばよいがと心配したそうである。共に文集を発行し、全国誌に送付して成果を問うていた頃であり、良きライバルだったのだろう。

山崎梅夫が発行していた文集は、『土の子山の子』である。昭和九年の発行で、尋常六年生の文集である。

2、文集『土の子山の子』の作品

昭和十年版『年刊 日本児童詩集』には、鞍岡小学校六年生の五篇の詩が載っている。いずれも文集『土の子山の子』から採られた作品である。

※ 縄なひ 尋六・作品集

七月

青蛙

泉 エミ子

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

山崎梅夫指導（土の子山の子）

うすみどりになつた青蛙

まぶたをつぶつて

どまにつくなつてゐる

いびくつたら

ひよつと目をあけて

とびたくないやうに
二足とんだ
どまのすみにつくなつてゐる

土間に入り込んだ青蛙が、這いつくばってじっとしている。目を閉じて動かないので、「いびくって」（いじって）みたら、ひよいと目を開けて、嫌そうに二足跳んで、また土間のすみにじっとしている。
じっとしているのを見ると「いびくって」動かしてみたくなる子どもの気持ちがよく出ている。昔の家には土間があつて、よく蛙やカマキリが入り込んでいたものである。時には蛇も。

十月

秋の夜

西山 晴

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

山崎梅夫指導（土の子山の子）

うす暗いランプがともつてゐる
たき火がとろく／＼燃えてゐる
内の人はみんなだまつてゐる

家族で火を囲みながら、誰も口を開かない。昼間の労働の疲れからか。厳しい冬を前にした、秋の夜の農家の一齣である。
囲炉裏に火が入っているのでも分かるように、鞍岡は熊本県境の山間地で、寒い所である。当時は交通も不便で、道路も無舗装。電気も来ていなかったのだろう。うす暗いランプの光が、当時の生活を思わせる。

十二月

ゆづの実

馬原カズ子

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

山崎梅夫指導（土の子山の子）

障子に日が入った
外のゆづの実
枝にしほれてうつる
障子ごしに取れさうだ

美しい詩である。夕日に、ゆづの木が障子に影を落としたのだろう。その影がくつきりして、柚子の実が障子越しに取れさうだとい
うのである。

二月

はみきり

松崎マサ子

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

山崎梅夫指導

はじめてはみ切った。

ざくざく切れる

汗が出る

肌ぬぎした。

晩

障子に月がかかった。

註 はみきりは馬や牛に食はせるかひばをきることを。

作者の家は農家で、牛を飼っていたのでよく「はみきり」をして手伝ったそうである。はじめての「はみきり」で、「ざくざく切れる」「長い刃に緊張していたのだろう。流れ出る汗には、そんな一生懸命な姿が見える。」「晩／障子に月がかかった。」は、単なる情景描写ではなく、そんな緊張した初めての仕事からの解放感と充実感の表れだろう。

春

馬原カズ子

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

学校の上の野原に

紫色のリンドウが咲いた

太陽が

しきりにみつめてゐる私の頭を

焼くやうだ

家で働く父母

どんなに仕事がいよいよだらう。

春になり、学校の裏山に咲いたりんどうを見つめながら、働いている父母のことを思いやっている優しい子どもの詩である。春になって仕事がいよいよなくなったらうと子どもに思うほど、冬の仕事は厳しかったのだらう。

この詩は『綴方倶楽部』昭和九年七月号に載ったものである。『綴方教育』第九卷八号には『綴方倶楽部』同号の広告が載っているが、その目次に「春日」という馬原カズ子の詩が見える。同号が失われているので確かめることはできないが、恐らく「春」の誤植である。

この他『綴り方倶楽部』（昭和十年六月号）には「高菜」という詩が掲載されている。「宮崎・鞍岡校 尋六 那須寅雄」とあるが、卒業生名簿によれば「那須敏雄」の間違いである。

高菜

那須寅雄（尋六）

宮崎県西臼杵郡鞍岡校

（山崎梅夫先生指導）

三日前に父と

だるくれた高菜。

土をもち上げてゐる。

葉に日がたって、

すべつとしてゐる。

百田宗治評

平淡に書いてあるが、どこやら気持の周到さの感じられる書き方である。野心的でなく、効果的でないのがよい。

「だる」には「人肥」と注がある。力強く、生命力を感じさせる詩である。生活力に満ちたところが評価されたのだろう。

3、山崎梅夫の詩の指導

（篠原（馬原）カズ子さんのお話）

「ゆづの実」「春」の作者、「馬原カズ子」さんにお会いすることができた。現在は「篠原」姓である。平成十五年八月のことである。八十才の高齢だが、お元気で、昔の詩をお見せすると、「詩を書くのは楽しかった」と、懐かしさからか涙ぐんでおられた。以下、そのお話からの「生徒から見た山崎梅夫の指導」である。

山崎梅夫は、生徒たちに、外を見て回って思いついたままを書けと言って、黒板を持たせて歩かせたそうである。

篠原さんたちも、三、四人連れだつて黒板を持って学校の裏山や畑を歩き、思いつくると黒板に書き、詩が出来ると教室へ戻つて提出した。そうすると、山崎梅夫はそのまますぐガリ版刷りで書いてくれた。手直し無しである。「だめ、また書きなさい」と言つて返される者もあった。批評したり、時には一緒に黒板を持って畑のなかを歩いたりしたが、先生が修正したり、手を入れることはなかった。「人が修正したものはつまらん。見たままを書いたら人の心を打つものだ」と言っていた。方言を使うなどということは言われなかった。

篠原カズ子さんは、山崎梅夫が、寒いので手袋の先を切つて鉄筆を握っていた姿を覚えているという。優しい先生で、「カズ子、カズ子」と可愛がつてくれたとも言っている。

篠原さんの言う「黒板」は、恐らく石版のことだろう。他の子どもの綴り方に「石版」が出てくるから、まだ使っていたものと思われる。篠原さんは大人になつても書くことが好きで、同人誌に書いたりしていた。今でも必ず枕元にメモ帳を置いておくそうである。小型のノートである。

鞍岡小学校創立百年記念誌（昭和六十一年）には、各年度の卒業生の思い出が載っているが、篠原さんは昭和九年度の卒業生として、詩を寄せている。

祝 鞍岡小学校百年祭に寄する詩

昭和9年度 篠原 カズ子

一 百年のあゆみを祝ふ学舎の

赤松が丘吹き抜ける

さわやかな風秋日和

こぞりて祝ふ此の佳き日

空にこだます鼓笛隊

二 紅葉もゆる祇園山

五ヶ瀬の流れと共に生き

住み良い町を育てゆく

その源の学舎よ

誇りも高く伸びゆかむ

三 困む山々黒峰に

遙かにのぞむ小川山

白雲流れ雪化粧

伝えもゆかし冠嶽

百年にて亦百年

いや栄えませ我が母校

4、西山晴の綴方「牛の病気」

昭和十年版『年刊 日本児童文集』（全日本綴方倶楽部編）には、鞍岡小学校から西山晴の綴方一篇が採られている。

牛の病気

西山 清

宮崎県西臼杵郡鞍岡小学校

山崎梅夫指導（土の子山の子）

僕の中の牛はこの間の日曜日の昼頃から食べなくなりました。さうして日のある内も夜もがたくとふるへてゐていつもうん／＼と呻くばかりで、何も食はずにをるので、家内中の人は心配してゐました。いつもお父さんとお母さんはいつ死ぬるかと言つて真夜中でも見に行つてをられました。明る朝お父さんと僕とお母さん三人で馬屋に行つて見たらはみはずこしも食はずにたゞねたまゝに目を白黒させてゐるので僕はあららと思つてお父さんに言ふとお父さんはすぐ、「これはどうしたもんか、どうもいかん。」と言つて牛の耳をにぎれば熱があるかないかゞわかるさうですから、牛の耳をにぎつてをられた。お母さんは「深谷の獣医さんを見たので見れば」と言はれた。お父さんは「うんそれもよいかも知れん」と言つて内へ帰られた。

僕は早く行つて来たのがよいのと思つてみると、又お父さんが来られた。お母さんは「青草でも切つて来て食べさせて見ろ。」と言つて行かれた。お父さんは牛を見てをられたが「これはいかん」と言つて走つて帰つてもう上らずにお婆さんに着物をとつてもらつて着てそのまゝに行かれた。僕は一人で馬屋に行つて此牛が死んだら内の仕事は進まないがと思つてみるとお婆あさんが来られて、「この牛ははらんでゐるから一ばん心配するたい。」と言つて牛をなでゝをられた。僕はもうお父さんは帰られるだらうと思ひながらなんべんも木戸まで出て見るともう下の方の道を行つて来られるのでよろこんで見てみると、お父さんが来られたので「獣医さんは」と言ふと、「おれは今馬見原に行つてゐるから今電話をかけたらすくにもどると言つた。」と言はれた。「もうすくにや」とお婆あさんが言はれた。

僕はまた馬屋に行つて牛の病氣を見てみると長くせずに獣医さんが自転車に乗つて来られたので僕は走つて帰つて「獣医さんが来られた。」と言つたらすぐにお父さんが出て来られて、獣医さんにもを言つて、馬屋に一緒に行かれた。僕も行つたら「あちらに行つてくれ。」と言はれたので僕はどのやうにされるのだらうかと思ひながら家の裏の方から見てゐました。見てみるとお父さんがわらをとりに来られたので僕はにげて行つた。するとお婆あさんやお母さんは牛を見にゆかれました。それならと思つて行かうとするとお父さんが、「皆んなあつちにいつてをれ。」と言はれてお母さんやお婆あさんもこられた。僕もお婆あさんやお母さんの話をきゝながら帰つた。

お父さんが走つて来られた。僕は何かと思つてみるとお父さんは、「胃に行つたもんが腸に行きえない」と言つて、たらひに水をくんで行かれた。

すぐに獣医さんもお父さんも来られたので僕は牛を見に行つたがどんなやうすもしてをらなかつた。たゞ呻いてぐわたくゝふるつてゐるばかりで帰りました。お日様が西の山にかくれておられた。帰つてみると獣医さんとお父さんは上つて、お茶をのんだりいろゝゝな話をしてをられた。

それがあつてから五六ぺん医者をつたので見られました。夜も昼も御飯をやはくたいて食べさせてをられました。さうして卵を食べさせると元氣ださうですから卵を飲ませられました。さうして一週間ばかりわるかつてよくなつたのです。それで二週間目から仕事をさせられました。すると二週間位はたらいで又悪くなつて其の日の昼からはみを食べなくなりました。それでいろゝゝな実物をまぜてくはせられたが食べなかつたので僕が、「また此間の病氣がでたのだらう」とお母さんに言つたら、「さうよ」と言はれたのでお父さんが「知れた話」と言つて笑つてをられた。其夜なんべんも行つて見られた。

明る日、夜はらんでゐたので牛の子を生んだと言ふ事をきゝました。

僕が急に「牛の子」といふと、お父さんが、「子牛は死んでゝ来た。子牛を生む月ではあつたが二十日ばかり早かつたのだ」と言はれた。僕は返事が出なかつた。「さうして牛はどこにでたの」と聞くと「もう今朝早く穴にかけた」と言はれたので、僕は「見せられればよかつた」と言ふと「もう見るもんぢやあない」と言はれて、「親牛が死ぬかもしれん」と心配してをられた。すぐに僕が馬屋に走つて行つて見たら、牛の尻から子牛がはらに入つてゐる内子牛をつゝんだかわが長くでてゐました。けれども牛はなんのこともなくしてゐるので僕は、「早く元氣になれ」と言つて帰つた。するとお父さんが又医師をつたのみに行かれた。

僕は学校に来た。授業が終つて帰つてみるとどうしてもいかんから又村長さんをたのみに行かれたから遊びに行けと言はれたので遊びに行つた。もう帰つてもよいだらうと思つて帰つてみると村長さんと長岡先生が来てをられた。僕は又遊びに行つて帰つて見るとをられなかつた。

さうして内で両方の医師さんがもういかんと言はれたさうでもううると言ふ話があります。

さうして此間墓掃除に行つてみると、よその人が僕の内の牛を引張つて行くのが見えまして。それで僕は涙が出さうになつたのでかくれてしまつたが、すぐにでて後をむき／＼して見てみると、牛はよその人に引張られてとうきびをたくさんもつて行つたので行がけに倒れはしないだらうかと心配しました。さうして親牛をうつたのが知れたのでせう、皆なが見舞に來られました。牛のことを今でもつくづく思ひます。牛はどうなつたでせう。

西山晴は詩「秋の夜」を書いた子どもである。「清」とあるのは「晴」の間違いである。「ひとみ」と読む。篠原カズ子さんの親戚で、太平洋戦争で戦死している。

当時の文集には全国的に「牛」を題材にした綴方が多い。農家にとって牛は貴重な労働力であり、財産であつた。子牛が死産か生きて生まれるかは農家には重大事だつた。牛の出産をめぐる騒動と、それを見守る作者の心配、親牛が売られていく悲しさが、こまかく書き込まれている。

文集の全てを見ることができないので確かな事は言えないが、六年生ということもあつて、『土の子山の子』には労働や生活（家計）への視点があるように思われる。西山晴の詩「秋の夜」もある意味では生活そのものを見つめたものだし、「はみきり」「春」もそうである。木村壽は後に『今村梅夫追悼集』の中で、このことに触れ、評価している。

5、木村壽の『土の子山の子』の評価

「今村君と私」

今村君と私との出会いは、文集が縁となつてはじまつた。

私は土々呂小学校に勤務していた。昭和七年から十年の三月までの三ヶ年間、文集を作り、文集の持つよきに心を引き込まれていた頃、山崎君（旧姓）は、西白杵郡の鞍岡小に勤務していた。如何にも、僻地らしさを示すような、至つて素朴な文集、というのか、十二、三枚の西洋紙を紙よりで閉じこんだ文集。その頃の、日本の綴り方教育実践界は、すばらしい躍進を続けていた。千葉春雄先生の紹介される文集を、お互いに交換し合い、自分の文集編集に、個性（教師又は学級経営の）を持たせる事に努力していた。そうした文集が全国の人々か

木村 寿

ら私にも寄せられていた。県内というよりむしろ県外の文集が多かった。その中に、山崎君の文集がひょっこり送られてきたのである。私はずにはいられなかった。鞍岡を探し、「ここで、山崎という若い男が、鉄筆を握っているのか。」と思うと、「土の子・山の子」文集を丹念に読まずにはいられなかった。読んで心をうたれた。

私が、何年もかゝって歩いた綴方の道を、この男は卒業後まもないのに、既に自分の行く道を歩きはじめていると思った。

山崎梅夫が「今村」姓となるのは、昭和十二年に当時の高千穂町長今村初蔵の所へ婿養子に行ったからである。今村梅夫は昭和四十三年に、五十六歳で亡くなっている。木村の文章は、この時出された追悼集の中のものである。

これによれば、『土の子山の子』は「十二、三枚の西洋紙を紙よりで閉じこんだ」「僻地らしさを示すような至って素朴な文集」だったようである。木村の文章にもある通り、この頃は各地で文集が発行され、文集活動の最盛期であった。木村壽自身土々呂小の文集『光』で全国的にその名を知られる活動をしていた頃である。佐々井秀緒の「文集製作の概況」（『生活綴方生成史』二五九頁）には、当時尾上祝夫が調査した各県別の文集の数が載っている。宮崎県は一〇となっている。福岡六、大分四、鹿児島二、熊本二、佐賀一、長崎六とあるから、宮崎はかなり盛んだったのである。福島三〇、宮城二八などには遠く及ばないが、全国的にもかなり上位の方である。木村壽はそんな宮崎の中心的な存在で、佐藤実も木村を尊敬していたと佐藤正男氏も述べている。その木村壽が高く評価したのが、次のような作品であった。

雪

六年

父が酒のんでかへつてきた

雪がつんだ

うつむきながら

母よびにいつた

母はかへらぬ

雪風が吹くよ。

この詩は、文詩集の中で、特に光っているなど、思いながら読んでいくと、所謂労働的な取材の多いことに気づいた。私があるところ、生活綴方に対する持論としていたのは、貧しき生活の中にあるものは、その貧しさを乗りこえる力、労働のきびしさにあるものは、そのきびしさに耐えて前進する心を培うことであつた。

山崎君は山村にあつて、中央とのつながりが少ないのに、既に、子どもを取りまく環境の現実にも心の眼を注ぎ、その現実を出発として、より高い方向へ、子どもを培いたいと努力しているのでなからうか。したがって、子どもが現実に対して、明るい姿勢を描いているのでは

ないかと考えたりした。

佐藤実との違いは、木村壽に「既に、子どもを取りまく環境の現実に関心を注ぎ、その現実を出発として」と言わしめた点にあった。三年生と六年生という年齢の違いも大きな要因としてあるが、佐藤実は必ずしも「子どもを取りまく現実の厳しさ」に目を向けさせようとはしなかった。これは教師の個人的な資質や考え方にもよるものであり、今日から見ればどちらが良いとか悪いといった問題ではないが、木村が「中央とのつながりが少ないのに」と言っていることから分かるように、当時の流れは現実重視にあった。山崎梅夫は既にその方向を向いていたのである。佐藤正男氏は「佐藤実と山崎梅夫には意見の違いがあったようだ」と言っているが、議論の内容が何であったか、分かるような気がする。

山崎梅夫は詩「雪」について、「雪のふる日が一箇月とはつづかないこの日向でも、北方的陰惨さがなくてもない。」と言い、この子の生活状況について、次のように述べている。

「生活はまた、教師の鞭以上に、児童にとつての脅威である。比較的暖い自然も、家庭が暗ければ強く子供の心をしひたげる。こんな父をもち母をもつた子が、級中の1-5ぐらいは常にゐるのだ。そしてひねくれと俗に言はれてゐる子供はこんな家庭に育つのだ。幸ひカネミは素直に育つて行つて、今では村の金持ちの家の子守に行つてゐる。」（『宮崎県教育』昭和十一年三月）
 こういう子どもに対して、教育は何ができるのか。

「この生活に対して、すなほな明るい姿勢をもたせることに努めて行きたい。だがそれは概念の押し売りであつてはならぬ。こゝに壇から下つて子供と考へていくことが生れはせぬだらうか。結局自己批判が綴方の母体であるやうに思ふ。われらは常に暖い生活への愛をもちたい。神でもなくこの血の通つた人間を愛したい。存在するが故の執着と罪悪をいとしまたい。そしてそのいとしまの上で光を仰いですゝみたい。そのいとしまを培ひ、光を仰ぐ心を育てたい。そしてそれは結局内面を暖めることより外はないやうに思ふ。」

したがって山崎梅夫にとっては、「はみ切り」（松崎マサ子）のように労働の中に喜びを見出す詩は、理想だったのである。

はみきり

松崎マサ子

はじめてはみ切った。

ざくざく切れる

汗が出る

肌ぬぎした。

晩

障子に月がかかった。

「元気のいゝ詩だ。すがくしい詩だ。百姓のよろこびはかういふものだ。山の子は健康である。働いたあとの障子の月よ。マサ子もよく切る。ほめられながら、夕飯を食べたことだらう。働きの中にはこんな歓喜がある。こんな歓喜を教育の外に考へてよからうか。」

今日も

鞍岡

尋六

奥村マサ子

今日も、

お父さん、お母さんは、

きれいな俵を、

あんで居られるだらう。

かちんかちんと、

つちの音をさせて、

冷い手で、

寒いだらう。

ばあばあと、

雪がふつてゐる。

働く父母を思いやる心という意味では、馬原カズ子の「春」と同じである。山崎梅夫はこの詩に対して、次のように言っている。

「この生活姿勢は貴いと思ふ。ひからびた徳目以上のものがあるやうに思ふ。一個の人間となつてみると、私は此子に学ばなければならぬ。此子は学校のストープを買ふために校長先生をはじめ職員児童が、道路普請にでたとき、血が流れても一日中鍬を手からはなさない。」

「この生活姿勢は貴いと思ふ」のは良い。「私は此子に学ばなければならぬ」というのも、良い。しかし「血が流れても一日中鍬を手からはなさない。」というエピソードを持ち出して、これを善しとする姿勢には、「木口小平」を思い起こさせる危ういものが感じられる。

次のような綴方がある。

よ。山の子よ。土をみつめる。むくむくと芽生える生命がある。お前たちは、大地の愛にいだかれ、大自然の教訓に生き、皇国の幸をうたひ、はたらきと愛と祈りの中に、この田舎にうまれて行く。それでいゝんだ。そこから次の日本は、ひらけていくだらう。土の子よ。山の子よ。おごそかな想ひに、胸をふるはせつゝ、昇る朝日を拝め。神国日本の姿を。」

「それでいゝんだ」とはどういうことだろう。当時の子どもたちの厳しい現状を考え、それに負けず、その中で能動的に生きるようにとの気持ちは分かるが、これは完全な現状肯定である。更に「彼等の中に育む正しい心を培ひ、雄々しい力を培ひ、我等は皇国へ捧げねばならぬ」(山崎梅夫)となると、「生活に対する能動的な姿勢」養成の行き着く先は見えている。どんな苦難にも挫けず祖国の為に尽くす皇国の民である。山崎梅夫の考え方には、こうした現状肯定に傾く危うさがある。

6、大菅小学校の文集『木の子草の子』

山崎梅夫は昭和十年に大菅小学校に転勤になっている。そこでは文集『木の子草の子』(高等科)を出している。文集が残っておらず、詳細は不明である。前述した文章の中には、自由律俳句らしきものがいくつか載っている。

笑つて乳のんでゐる眼に、広い母の胸です 高一 巧
 汗あえて働く父の着物、洗へど残る野草の匂ひ 巧
 石垣のかづら、しつかりとくつゝいて青い芽 巧
 お祭の幣踊つて、青い麦畑です 有
 やつとでた麦の芽、丹助岳も北風です 有
 みんなお膳について、障子にやはらかい目 ミエカ
 やうじくわへて父、一輪咲いた梅を見てゐる ミツ子
 まあこのお正月でも、巡礼さんが来られた キワノ
 草原でふくといゝ、ハーモニカの音です リツ子
 かまの中でぬくい、風の音です 常一

時代を感じさせない、なかなか面白い作品である。最後の句の「かま」は炭焼き用の窯とのことである。炭を出したあとの窯の中で遊んでいるのである。

6、熱血教師・山崎梅夫

西臼杵郡日之影町の元教育長、甲斐昭治郎氏は山崎梅夫の甥である。氏によれば、山崎梅夫は熱血漢だったという。その熱血漢ぶりは議論好きにも現れている。病床にある佐藤実を訪ねて夜遅くまで議論していたことは前にも述べたが、その議論好きには木村壽も参つたらしく、「彼は、私の宅を度々訪ねてくれた。来れば、語り止まず、つい夜の更けるのを忘れて語った。あの大きな声、それでいて素直なことば、私も後には、彼が来ると、今夜は十一時までと、禁言令をしいてしまった。」と言っているほどである。そういう熱血漢の叔父が、小学校五、六年生の時、甲斐昭治郎氏の担任になった。

「私の高千穂尋常小学校五年、六年の受持は（昭和十三年、十四年）『今村梅夫』先生であった。（略）私には先生を選ぶ権利はなかったし、私の叔父が学級担任になったことは苦悩の二年間であった。私のことで必ず父や母につつぬけの学校生活での情報が告げられると思つたからである。私にとつては、とてもいやな圧迫を感じる二年間だったし萎縮することが多かった。級友と騒いだり教室のガラスが割れても、原因や理由も調べずに私が叱られ役だった事例は、余りにも多かつた。しかし叔父『今村梅夫』先生にも私は小学生ながら感服する事が多く、そつと誇りにもしていたし、級友から慕われていた。日本史の時間になり、人物や事件が教科書に出てくると、話は熱気をおび涙を流しながら熱弁をふるわれた事は、良く覚えている。例えば、忠臣蔵や、日露戦争や、二二六事件などの時であった。」（甲斐昭治郎著『啐啄の記録』）

身内には厳しかったらしく、氏が教師になってからも研究会等で手厳しくやられたと言っている。しかし「修学旅行（六年生は北九州方面）に行く金がなかつたので諦めていたが叔父が経費を出してくれたことが後でわかつた。」（同前）とあるように、甥故の厳しさだったのだろう。

甲斐昭治郎氏の文章に、日本史の時間での熱血漢ぶりが出てくる。この熱血漢ぶりは、昭和十五年に今村（山崎）梅夫に受け持ってもらつたという飯干和孝氏の話にも出てくる。地元の新聞「夕刊デイリー」（平成十五年八月八日）に載つたものである。

小学校の二期も終わりが近づくと、学芸会の準備が始まる。昭和十五年、五年生の担任は、今村梅夫先生だった。語学が優れていて、特に歴史になると熱が入っていた。

「今年の学芸会は、郷土の勤王の志士・芝原又三郎入道の偉業をたたえる劇とする」と発表された。芝原又三郎入道とは、後醍醐天皇が崩御されて後村上天皇が即位された一三四〇年ごろ、天皇の令旨を受け九州統制に赴かれた懐良親王に忠節を尽くしている千本槍で有名な筑紫の郷土菊地武光一族に仕えた、高千穂の地頭だと教えられた。

「まず、劇中の歌を作るから、この時間、君たちは自習にする」と、先生は黒板に向かって書いては消しを繰り返した。出来た歌詞が芝原又三郎の歌だった。

山うるわしく水清く 朝日夕日の照す国 天孫跡をたれ賜い

高き御徳たてまつり 御宮どころの高千穂の 勤皇歴史の物語り

今を去る事六百年 延元興国世の乱れ 大義名分暗くして 賊臣権をもはらにし

豺狼巷に満るとき 臣あり芝原又三郎

作曲は音楽の江藤辰夫先生で、素晴らしい歌が出来た。しかし「延元興国とか豺狼巷にとは何でしょうか」の問いに、「今の正、昭和というのと同じ、豺狼巷とは山賊や盗賊などが世間を荒していたこと」だそうで、小学五年では劇の内容も理解できなかった。

戦国時代の服装の鎧冑などを厚紙で作らなければならず、まして芝原又三郎が敵を欺くために僧侶に扮してお経を唱えるなどあり、短時間で覚えるのも至難であり、誰も主役になる者がいなかった。

先生の説得も聞き入れられず、歌まで出来ていたのに「芝原又三郎入道物語」は幻の劇となってしまった。さぞ先生も残念だったことでしょう。(後略)

何ともユーモラスな文章である。生徒に自習をさせておいて即興で歌を作るなど、「今村梅夫先生」もなかなかのものである。飯干氏は「熱血漢のある先生だった」と回想している。その熱血漢ぶりも生徒に受け入れられないこともあったようである。

それにしても今村梅夫先生の即興の歌を良く覚えておられるのだと、感心させられる。それだけインパクトの強い先生だったのだろう。学校でそういう熱血漢ぶりを発揮していた「今村梅夫先生」だったが、それは研究会等でも同じだったようである。甲斐昭治郎氏は研究会の席上で「君の授業は教育逸脱である」「教師としての資格はない」と評されたと述べている。感情的にも激しいものがあつたのだろう。

7、高千穂小学校の子どもの詩

昭和十三年の『綴り方倶楽部』四月号には、高千穂尋常高等小学校の作品が掲載されている。佳作である。

佳作

月

森本 隼男 (尋六)

宮崎県西臼杵郡高千穂校

〈今村梅夫先生指導〉

五時頃だ

ふとんから出てゐた僕

起上らうとすると

硝子ごしに光が入ってくる

月の光だ
大きな丸い月

父のうす黒い顔を照してゐる

近頃買ったよい時計

よい音を立ててゐる

今日も天気だらう

庭の電気霜を照してゐる

冬の早朝、まだ暗く、月の光が寝ている父の「うす黒い顔」を照らしているところに生活を感じさせる。しかし月の光と霜を照らしている電気のおかげがうまく処理し切れていない点、「よい時計」といった生の表現等が「佳作」としての評価になったのだろう。

母のあかぎれ

花田 恒夫（尋六）

宮崎県西臼杵郡高千穂校

（今村梅夫先生指導）

小石が出てゐる

母の足は痛いらしい

母はあかぎれが痛いと言つた

小石にさわると

母の足はひくりとする

上に岩がでてゐる

岩のしずくの氷が

長くさがつてゐる

母はちんばを引いて

水車の中に入つた

僕は後から入つた

この詩も佳作である。

母親が水車(水)に関わる仕事をしており、それ故の「あかぎれ」なのだろう。それは分かるが、「あかぎれ」をもたらす具体的な生活が描き切れていない。ために、詩としての深みに欠けるのである。

昭和十三年五月号には、「思ひ出」という綴り方が掲載されている。

思ひ出

市野 金実(尋六)
宮崎県西臼杵郡高千穂校
(今村梅夫先生指導)

一 昨年の冬、或土曜日の午後に向山にある母の里に遊びに行つた。夜爺さんが「明日の朝早く起きれ、わな見につれて行つてやる。」と言はれた。「わなは何処にかけてあるとの。」と聞くと、「三ヶ所山といふところにかけてある。もう何日も行かぬからかゝつてゐるかも知れん。」と言はれた。僕はうれしくてかゝつてゐたらもらつて帰ろうと思つて早く寝た。けれどもなかなか眠れなかつた。

朝起きた時はもう爺さんは起きて居られた。「早く起きんか。もう山に行つてたきぎをせおつて来たんぢやが。」と言はれた。「うそぢやろが。」「ほんとかだ。庭を見て見れ。」と言はれた。おほかたうそだらうと思つて戸をあけて見たら、なるほどとうじんがるひに四わつてある。「早いもんだ。」とつぶやきながら顔洗ひに行つた。石で作つた水ためには水がこぼれるやうに入つてゐた。洗面器に入れて手をつけて見たらひりつとした。急いで顔を洗つて神様にまゐり御飯を食つた。御飯を食ふ時も胸がどきどきして御飯がのどをろくろく通らない。汁をかけて二はい食つた。支度をして庭に出た時は爺さんは道を行つてゐなかつた。

やつと追ひついて「どげやつてかけてあるとの。又どんぐらひかけてあるとの。」と一度に二つ聞いた。「どげやつてかけてあるかは見らんとわからんが、まあ百五十から二百と思へばい。」とおつしやつた。話しながら行つてゐると、やがて山の入口に来た。

見るとすこしへこんだ所に水がこんこんと湧いてゐた。のどがかわいてゐたので手ですくつて飲んだ。こんな時飲むのはふだんちがつて一だんとおいしい。ふと前を見ると高さ一間幅三尺位の穴がある。「爺さんこの穴はどうしたつの。」と聞くと、「此所は鉄の出る石をほつた所だ。そのへんに黒い石があるどが、それはよいのを取つた残りだ。」と、おつしやつた。中をのぞいて見ると暗くてどこまであるかわからない。時々冷たい風が無気味に頬をなでる。なほ見てゐると、「金実、中に入つて見んか、山の上まで行つてゐるが。」とからかはれた。

「ふうふう」言ひながら山の上のわながかけてある所についた。かゝつてゐるかと思つて見て行くがどれにもかゝつてゐない。又見て行

く。だがわな見はなかなかむづかしい。皆見たと思つても、かけた者でないと思つてしまふ。

すこし見ていくと林のやうな所に出た。土がぶく／＼してやはらかい林の三分の一ばかり登つた。ちいさんが、「待つて居れ。」と言はれてもつてゐた竹で土を掘り始められた。何かと思つて見ると山いもだ。だんだん掘つて行かれるが土がやはいいで深いらしい。やつと山いもが見えだした。又すこし掘つてひつぱられたら、親指を三本合はした位の長さ五十糎もあるのが出て来た。「後はもう手に合はん。」と言つてわながある方へ行かれたのでついて行つた。

だんだん見て行くがどれもかゝつてゐない。所々にはづれてゐて針金がきれてゐたりほじけてゐたりしてゐる。爺さんは、「逃げたり取られたりしてゐる。」とつぶやきながらなほしてゐられる。にげた鳥や兎は首をしめられてゐるから生きてゐれば苦しい息をしてゐるだらう。又死んだりしたのもあるだらうと思つた。又だんだん見て行くが、一つもかゝつてゐない。いよいよがつかりして見て行くがやつぱりかゝつてゐない。「今日は一つもかゝつてゐないかな。」と言はれた。とうとう一番終りの所まで来た。泣き出しさうな顔で、一番終りのわなを見ると、かゝつてゐる。赤土色の毛がお日様に光つて大きい山鳥だ。首をしめられてゐる。尾がながい。「かゝつてゐる。」と言ふと、「ほんとか。金実がいゝみあげが出来た。」と言はれた。鳥をはづしてもらつてかゝへて見るとなかなかづつしりと重い。もうわなはない。かへり道についた。

さうして三方辻の所まで来た時、爺さんが僕に、「金実此所からどつちの道を行つたらいいかい。」と聞かれた。僕はちよつと考へて南の方を指さして、「此道。」と言つた。さうしたらあつた。「どうしてわかつたか。」と言はれたので、「来た時に西の道を行つて山にのぼり、東に来て下り西に来たら今立つてゐる所に来たからぢやん。」と言つた。帰りは早い。鳥をもつてゐて早く人に見せたいから。家がある所に出た。道で遊んでゐた子供たちが、「山鳥、山鳥。」と言つてほしさうにしてついでくる。隣りの人が、「いゝ土産が出来たい。」と言はれた。帰つて窓から投げ入れると中からうれしきさうな声がかつちやになつて聞こえた。

午後になつて、思つてゐたとほり山鳥はもらつてかへり、山いもは焼いて食つた。家にかへつて見せると、「おれはもう何年かぶりに見た。」と言つて、爺さんや婆さんがうれしさに言はれた。

〔評〕母の里方について、おぢいさんに、わなのかかつてゐるところに連れていつていたことを書いてある。全体が、がつしりとしてゐて、きびきび書いてゐるのがよい。「石で作つた水のためには水がこぼれるやうにはいつてゐた」とか「水がこんこんわいてゐた」とか、はつきりみてゐるのもよい。山鳥がかかつてゐて喜ぶところ、かへつてみんなに見せるところもよい。絵を入れたのも、いかにもほしいところだし、「どちらにかへつたらよい」と聞かれはつきり答へられるほど方角などが分かるのもうらやましい。

高千穂尋常高等小学校での今村梅夫の指導作品は、あまり見ることができない。雑誌が残つていればもつと多くの作品が出てくるのだから、今のところ、上記の作品のみである。

8、宮崎静坐会との関係

甲斐昭治郎氏によると、今村梅夫は宮崎静坐会に属していた。宮崎静坐会は宮崎市の眼科医杉田正臣が主催していた会である。京都医専時代に岡田虎次郎に師事し、宮崎に帰って宮崎静坐会を開いたのである。杉田正臣は今村梅夫について「今村さんは、いつ会っても、全身エネルギーのかたまりのようで、フアイトに燃え肉と霊との斗いに苦しみ抜いてこられた方のように見えた。私との因縁は芦田恵之助先生の御教え特に静坐に於てつながっていたように思う。」（『今村梅夫追悼集』）と述べている。

宮崎静坐会との関係で芦田恵之助が高千穂小学校で授業をしたことがあったが、その時クラスを提供したのが今村梅夫だったという。甲斐昭治郎氏の担任だった時である。授業を受けた氏によれば、芦田恵之助は温厚な人だったそうである。

宮崎静坐会、芦田恵之助とのことについてはまた稿を改めるが、今村梅夫は思想的・宗教的にも変遷があったらしく、日之影町高松中学校長時代には次のような詩を書いている。

イエスさまよ

イエスさまよ！

あなたは

肉を否定された。

だから

あなたは、肉に否定されて、

十字架につかれた。

イエスさまよ！

今朝は何というよい朝でしょう。

私はこの五ヶ瀬川沿いの

粗末な住宅が、

とても好きなのです。

窓いっぱい緑がながれこんで

小鳥がちらちらと動いて、
白い瀬の音がきこえて、

青いふかい絶壁のかけがさす！

それに無知な十二人の弟子にかこまれて
光に包まれていられる

最後の晩さんの小さな顔をかけた聖壇がある！

イエスさまよ！

私の心のうみは、

今朝はまだ嘖きでて参りません。

私の掌をあわせて

あなたを見上げる。

私は肉からはなれられないのですが、

やはりあなたの否定は 正しいようにあります。

でも、実をいうと、

あなたは何という無茶な方でしょう。

それでいて

あなただけに

よろこびと不安があるようです。

ともかく あなたは、

やさしく美しく強い方、

イエスさまよ！

私の好きな人よ！

私はすっかりあきらめているのですが、

どうか私を愛して下さい。

この濁悪の濃海にむせびあえぐ私を！

杉田正臣の「肉と霊との斗いに苦しみ抜いてこられた方のように見えた。」という言葉を裏付けるような詩だが、この時期キリストに惹かれていたことは間違いない。ところが、昭和三十七年には日蓮正宗に入信しているのである。この間の心境の変化がどういいうものであったかは分からないが、精神的な苦悩から求めるものがあつたのだろう。

今村梅夫は昭和四十三年十月、瀬口小中学校校長時代に亡くなっている。脳溢血である。

附記 本稿は「宮崎県児童詩教育史」の第二部にあたるものである。本来記述を児童詩に絞るべきであるが、綴方関係も本県では資料が少なく「発掘」の意味があること、特に文集が現存することは珍しく、佐藤実の文集『芽』については綴方にも多く言及した。

なお、資料収集にあたって、甲斐靖朗平岩小校長、佐々木龍二教頭、熊本新一美々地小校長、佐野晃一押方小校長、養部樹生氏、飯干竹清氏、江藤博方氏、佐藤正男氏、興梶弥寿彦氏、佐藤祐一氏にお世話になった。

甲斐昭治郎氏には山崎梅夫についてご教示をいただいた。

文集「芽」に関しては緒方俊輔氏（高千穂町コミュニティセンター主任）に負うところが大きい。氏の尽力で文集「芽」にもめぐりあえたのである。所蔵者の江藤博方氏には貴重な資料を御提供いただいた。

若い頃からの友人である矢野侑三氏（松尾中学校長）には美々地小学校へ案内して頂いた。これをきっかけに本稿の調査は始まったのである。

また同じく学生時代からの友人である戸高悟氏（坂本小学校長）には五ヶ瀬瀨町鞍岡へ案内して頂き、馬原カズ子さんのお話を伺うことができた。

記して感謝の意とする次第である。